

EAA UTokyo-PKU

**Summer
Institute
2024**

Civilization & Climate

東京大学東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, THE UNIVERSITY OF TOKYO



Contents

Welcoming Remarks

ISHII Tsuyoshi 石井剛.....	4
SUN Feiyu 孙飞宇.....	9

Student Reports

Group 1.....	10
Group 2.....	22
Group 3.....	32
Group 4.....	42

Activity Reports.....	52
------------------------------	-----------

Participant List.....	58
------------------------------	-----------

Afterword

QU Jingdong 渠敬东.....	60
ZHANG Fan 张帆.....	66
CHEUNG Ching-yuen 張政遠.....	68

2024 年度サマー・インスティテュート序文

ご挨拶に代えて



ISHII Tsuyoshi

石井 剛

東京大学東アジア藝文書院院長

毎年この時期に行われる、北京大学と合同のサマー・インスティテュート。今年は仙台での開催となりました。本来は、1年ごとに北京と東京で持ち回りにする約束だったのですが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行に阻まれて、東京で実施したことはまだありません。そして今回は、いろいろな事情が作用して、初めての日本でのサマー・インスティテュートを仙台で行うことになったのでした。プログラムを策定した張政遠さんは東北大学出身ということもあり、東日本大震災被災地のその後を見届けることを言わばライフワークのようにしていますから、今回もおおのずと津波の被害が激しかった閉上地区の見学など、震災の記憶と復興に関して参加者の皆さんが現場を訪れながら考える機会となりました。交流の主会場となったせんだいメディアテークには「3がつ11にちをわすれないためにセンター」が併設されており、もしかすると自由時間にはそこを訪れた学生さんもいたかも知れません。しかし、記憶というのは両義的です。苦痛の記憶はいつまでも人を苛みますし、傍観者の目からは「スティグマ（烙印）」となって偏見と差別の温床にもなりかねませんから、忘却してしまいたいと思う心が生まれてくるのは当然です。その一方で、肉親や友人の死を悼み、失われた郷里を想う気持ちを抑えることは難しいでしょう。それに加えて、復興が必ずしも被災者の理想に沿わないかたちで行われ、日本社会の全体ではその半面で急速に記憶の風化が進んでいくと、復興半ばの地域の人たちは取り残され、切り捨てられていくことへの不安、ひいては憤りすらも感じることでしょう。したがって、忘れたい、忘れられない、忘れたくない、忘れてほしくない、などの気持ちがせめぎ合う中で、日々はこうして過ぎていくのです。参加者の皆さんは、多かれ少なかれ、自らの身体でそうした現実のほんの一端に触れ、それについてお互いに話し合いながら、プレゼンテーションを繰り返していったようです。そのこと自体が貴重な出来事であったでしょう。

しかし、教員からの最後のコメントとして孫飛宇さんが投げかけた問いは、皆さんが三日間の見聞と議論を経て、それぞれの力でたどり着いたステップを、一気に高いレベルに向かって引き上げようとするものでした。孫さんの問いをわたしなりにパラフレーズするならば、それは「被災者と被災者でない者を分けるのはいったい何か？」という問いです。この問いは、皆さんの発表を聞きながら、うまくことばにはできないモヤモヤを感じていたわたしをはっと目覚めさせるものでした。孫さんはこう言ったのでした。「あなたがたは被災の現実を体験していないという。しかし本当にそうなのですか？皆さんもまた皆さん自身の現実の中でさまざまな苦しみや痛みの経験をしながら育ってきているはずではないでしょうか？」

そこで、以下ではこの問いをわたしなりに引き受けてみたいと思います。

今回、「文明と風土」というテーマのために講義を提供してくださった渠敬東さんは、ウィリアム・ターナーを論じた『希望の誤謬——ターナー論』という刊行されたばかりの著作の中で、エドモンド・パークの崇高論を引用しています。それによれば、危険と苦痛は愉悦に変わりうる可能性を随伴しており、恐怖や驚きに襲われた際に、「一定の距離を置く」ことで危険を免れた瞬間に、大自然の圧倒的な脅威に対する言葉を失うような畏敬の念が湧きあがってくる、それが「崇高」です。渠さんは、かかる「人を悦ばせる恐怖」は良知の呼び声であり、あらゆる道德秩序の源であると述べています（同書、17ページ）。

EAA の仲間には崇高をテーマに研究を続ける星野太さんがいます。彼はこのパークの崇高論（『崇高と美の観念の起源』、1757年）が当時多くの人に読まれた背景として、刊行の2年前に発生したリスボン大地震の経験があったであろうことを示唆しています。実際、リスボン大地震は当時のヨーロッパ社会に大きな驚きをもたらし、カントも複数の地震研究論文を後に著しています。そして、星野さんの教えてくれるとおり、カントこそはこの地震を念頭にしながら彼自身の崇高概念に関する考察を進め、やがて『判断力批判』（1790年）へと結実させたのでした。

1755年11月1日にリスボンに近い海域を震央として発生した大地震は津波や火災を伴って大きな災害となり、被害はポルトガルだけではなく、スペインやモロッコにまで及んだといえます。しかし、それにしてもパークもカントも地震の被害を直接受けたとはあまり思えません。なるほど、崇高とはたしかに一定の距離を置くことによって初めて観念されるものなのでしょう。言わば、傍観者の感覚なのです。だからこそ、星野さんは、パークやカントが気づくことのなかったであろう崇高を構成するもうひとつの感情として、「カタストロフに魅せられる「疚しさ」」を挙げています（星野太『美学のプラクシス』、32ページ）。星野さんは、そこで考えます。

重要なのは、魅惑と拒絶が入り交じる、その曖昧で仄暗い感情から目を背けないことだ。その感情を抑圧しつづけるかぎり、人はカタストロフによる崩壊を埋め合わせるための、偽の紐帯に屈することをまぬがれない。〔中略〕そうした紐帯に回収されずにいるためには、独善的ではなく、かといって脆弱でもない、みずからの小さな領土を確保するための技術（アート）が必要である。そこに欠くことのできないものがあるとすれば、それはいかにももっともらしい畏敬や憐憫の感情ではなく、自分が安全な場所を占めてしまったことによる、一抹の疚しさであるだろう〔後略〕。（同、33 ページ）

疚しさを別の道徳的呼びかけに回収されることのないままに保ちつづけること、それが崇高に魅せられることを拒否できないわたしたちにとっての道徳の源泉である、とまでは星野さんは言っていませんが、渠敬東さんや孫飛宇さんならおそらくそのように言いきることでしょう。わたしはそう思います。なぜなら、仙台にいる間、寝食を共にして彼らと語りあったことの中には、「偽の紐帯に屈する」ことのない教育をいかに彼らが実践しているかということが確固として含まれていたからです。そしてわたしは、大学における学問こそは、確保すべき「小さな領土」になるべきであり、それを永遠の未来において実現するべく努めることこそが EAA の役割であるということを確認しています。

春学期に、わたしたちはオムニバス講義「30 年後の世界へ——ポスト 2050 を希望に変える」のなかで、復興の技法（アート）をテーマに掲げたのでした。気候変動に代表される大きな環境変化の中で、わたしたち人類は今後数十年、さまざまな災害と共に生きていくことを強いられるでしょう。言い換えれば、復興とは一度かぎりのプロセスではなく、繰り返される災難の中から何度でも生き直そうとする終わりのない繰り返しにほかならないのです。それは途方もないことのように思えます。しかし、そうでしょうか？ わたしには、そのような繰り返しこそが人生であり、人がよりよき人に向かって成長していくとは、まさにその繰り返しにほかならないと思えてなりません。

リスボン大地震と言えば、ヴォルテールの小説『カンディード』を思い出す人も多いでしょう。しかし、読めばすぐにわかるとおり、この小説は大地震だけを取り上げた作品ではなく、登場人物たちは何度も何度も死地を彷徨う苦難を経験しながら世界をめぐる。それはあまりにも壮絶で、彼らは最後には、「神が創造したこの世界で生じることとはすべて必然的であり同時に善である」とする信念を放棄するに至る、と一般には評されています（わたしはこの小説の結末をそう読むのはじゅうぶん正確でないと思っていますが）。しかし、彼らは二ヒリズムに陥ったわけではありません。

「ぼくにわかっていることは」と、カンディードは言った。「ひとは自分の畑を耕さねばらない、ということ」「そう、そのとおり」パングロスは言った。「人間がエデンの園においてもらったのは、聖書にもあるとおり、そこを耕すため、つまり労働をするためなのです。〔後略〕」（『カンディード』、227-228 ページ）

彼らはこうして、仲間と共に労働することに悦びを見出していきます。そしてそこにはもはや、唯一の神に対する帰依の定めはいつでもよいものになっていました。いや、きわめて人間的な、地に足の着いた生活を愛する人たちがそこにはいました。

ヴォルテールには「リスボン大震災に寄せる詩」があります。その最後の一連を引用しましょう。

かつて、あるカリフは臨終のさい
つぎのような祈りの言葉を神にむかって唱えた
「唯一の大王、唯一の無限の存在であるあなたに
私は唯一あなたがお持ちでないものを捧げます
すなわち、欠点、後悔、苦悩、そして無知」
いや、神に欠けているものはまだあるぞ、それは「希望」だ
（同、248-249 ページ）

欠点、後悔、苦悩、無知に満ちた人間。しかし、そのような人間であるからこそ、「希望」もまたそこにあるのだ、詩人はそう気づくのです。もちろん、希望とは往々にして何とも陳腐で空虚なかけ声です。渠敬東さんのターナーこそは、その陳腐さと空虚さを冷徹に見据えた文人でした。その著作のタイトル「希望の誤謬」は、ターナーの詩から取ったものです。それはハンニバルのアルプス山脈越えを詠んだものでした。このアルプス越えは何とか成功したものの、その軍勢は深刻な打撃をこうむったようです。ターナーの「Snow Storm」と題された有名な油画はまさにその壮絶ぶりを描いています。この画は歴史に仮託しながらナポレオンの失敗を予言するものであったとも言われているようですが、とにかく渠敬東さんはこう言います。

ハンニバルの世界征服の野心は、必ずや自然によって打ち負かされる。ここでいう自然とは吹雪のようにすべてを破壊する自然の力だけではなく、人の自然にひそむ欲望、虚栄、懦弱でもある。（『希望の誤謬—ターナー論』、66 ページ）

何という希望の誤謬！希望は往々に欲望や虚栄心、そして懦弱を糊塗するための強

勢として現れ、そしてそれは「必ずや」打ち負かされていくでしょう。星野さんが言う「偽の紐帯」もまた、そのような希望に塗り固められた道徳の装いでわたしたちの前に繰り返し現れるものことかも知れません。

わたしたちの希望は、そのようなものとは別のものであるべきです。わたしは、最終日のコメントで魯迅の「忘却のための記念」ということばに触れました。記憶するのはなぜか。なぜ忘れてはいけないのか。これはそう簡単に解ける問いではありません。だからこそ、この魯迅のことばを、今後、今回の体験について思い出すときに、皆さんには思い起こしていただきたいと思います。魯迅のことばは同名のエッセイのタイトルです。そこでは、魯迅と共にハンガリーの詩人ペテーフィの翻訳に関わった若者の非業の死がテーマになっています。そして、魯迅もまたペテーフィから「希望」を与えられた人でした。

仙台と言えば魯迅です。わたしは魯迅に導かれながら、この旅を人なつこい笑顔を絶やすことなくしかも哲学者のような深い眼差しを湛える北京大学の先生方と共にしてきました。長くなりすぎたこのレポートの最後は、やはり魯迅で、しかも彼がペテーフィから受けとった「希望」のことばによって締めくくりたいと思います。

絶望之為虚妄，正與希望同！

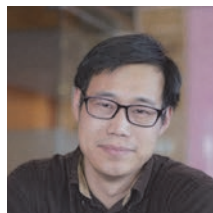
2024 年东亚研究项目暑假课程报告序言

SUN Feiyu

孙飞宇

北京大学元培学院副院长

北京大学社会学系副教授



2024 年 9 月初，北京大学元培学院东亚研究项目的师生，按照项目的规划和双方的约定，来到了日本，参加由东京大学东亚艺文书院主办的暑期集中讲义活动。一同随行的，还有受邀参加讲座的北大社会学系渠敬东教授和张帆教授。

东京大学东亚艺文书院的张政远教授非常用心，特地把活动设计在了日本东北地区的仙台。由于鲁迅的缘故，在出发之前很久，师生们就都对此行充满了期待，所以，虽然经历了地震的预警和紧张，北大的师生们还是如期到达了东京，和张政远教授、渡边老师以及东大的同学们会合，准时到达了仙台，事务繁忙的石井教授也在第二天到达仙台，和我们共同开启了为期五天的暑期集中讲义。这五天的时间里，天朗气清，惠风和畅，我们都留下了难以忘怀的美好记忆。

这次讲义的主题是“风土”。在仙台图书馆，渠敬东老师和张帆老师各自为同学们讲述了相关内容的精彩讲座。更重要的是，东亚艺文书院为双方的学生们安排了一场又一场极为精彩的关于仙台北地“风土”的参观和旅行。我们欣赏了日本三大绝美景色之一的“松岛”风光，怀着沉重的心情参观了海啸灾难发生地，也带着“朝圣”的心态拜访了鲁迅在就读“仙台医专”时上课的教室。策划这次项目的张政远教授曾在日本东北大学学习多年，留下了许多青年时代的回忆，对于仙台许多地方都充满了感情。他经常带着我们在仙台的小食肆、小酒馆、咖啡馆和公园里漫游，也给我们讲了许多当地的典故和故事。在他的带领下，我们在仙台市里、在林荫道上的漫步，成为了体会仙台风土的绝佳机会。我觉得，这也是我们这个项目的真正的意义所在。

对于北大的师生同学们来说，到另外一个国度展开游学并不容易。这是一次很难得的机会，更是珍贵的体验。古人云，路漫漫其修远兮，吾将上下而求索。希望参加这个项目的同学们能够从这样的漫游中体会到学术的真谛，也希望两校的同学们能够理解，这样的学术共同体、交流以及“风土”的体验对于你们未来“求索”的意义。



Group1

Member


MARUYAMA Mai	丸山真衣	The University of Tokyo
OUYANG Yafei	欧阳雅非	Peking University
WAKABAYASHI Manabu	若林学	The University of Tokyo

Individualism or Dividualism?



UT 丸山 真衣
UT 若林 学
PKU 欧阳 雅菲

OUTLINE



PART 01 Introduction
PART 02 Cases in Japan
PART 03 Cases in China
PART 04 Conclusion

PART 01 Introduction

Why we choose this topic

What are individualism and dividualism?

Individualism (個人主義)

- emphasizes the worth of the individual
- Individuals cannot be further divided, and the center of the individual is the only true self.



中野啓一郎

Dividualism (個人主義)

- Our personalities differ from situation to situation. → Dividuals
- Instead of recognizing only one "true self" at the center, we see all these multiple personalities as our "true self".
- Relativize individualism. Emphasis is placed on relationships.

Individualism and Modern Civilization

- Individualism is the foundation of modern Western civilization (civilization as progress)
- Imported into East Asia after modernization

c.f. Soseki Natsume "My Individualism"
夏目漱石『私の個人主義』



Dividualism and Fengtu/Fudo (風土/風土)

- Fengtu/Fudo is the environment that surrounds you, including a variety of things from material to social structures
- Fengtu/Fudo allows us to be a dividual in each social context.

PART 02 Cases in Japan

Before and After the Great East Japan Earthquake

Myth: Japanese are collectivistic

- Ruth Benedict described the Japanese as a collectivistic group in *The Chrysanthemum and the Sword* (菊と刀).
- The totalitarianism of Japan during World War II was recalled and the myth convinced people.
- Japanese-style management (日本式経営), seniority system (年功序列), bullying (いじめ)



Reality: Japanese are more individualistic than believed

- 高野浩太郎『集団主義という錯覚』
- There is no empirical evidence for that myth.
- The tendency to strengthen unity and act collectively to counter external threats is a general tendency among human groups, not limited to the Japanese.
ex. the Red Scare in America
- Results of psychological studies: No significant difference in the degree of collectivism between Japanese and Americans.



Kanji(漢字) of the Year

- As part of its efforts to encourage people to rediscover the profound significance of kanji, "The Japan Kanji Aptitude Testing Foundation" holds the event every year. In this event, they collect kanji characters that best represent the societal trends of the year and then announce the kanji with the most votes at Kyomizu Temple in Kyoto.
- In 2011, "絆" was chosen as the kanji of the year.




What is the meaning of “絆”?

- “絆” means the bonds or connections between people
- 2011 was the year that we came to realize the importance of “絆” due to the unexpected disaster such as “The Great East Japan Earthquake”, heavy rain damage from typhoons and so on.
- Especially, the experience of losing the precious lives of family members and friends, or spending anxious days without being able to contact them due to the Great East Japan Earthquake, made us realize the importance of the “絆” with family, friends, loved ones, and people in our communities.
- It also served as a reminder of the fragility of human relationships, which are said to be growing weaker.



The change before and after the earthquake

- from individual to dividual

The importance of community engagement is coming to light in situations like...

- Evacuation from the tsunami while calling to the neighbors
- Living in an evacuation shelter
- Relocate to the higher ground
- Returning home from evacuation sites after the nuclear disaster

The change before and after the earthquake

- “intermediate group” [中間団体/中間支援団体]

The importance of “intermediate group” is coming to light because they, such as...

- local community like shopping district
- various occupational group
- religious group
- participated in the support activities at first, and they did a great job by using a connection or cooperating.

To be more precise...what is “the disaster defense network”

“the disaster defense network” in 宮城県石巻市八幡町:

nearby residents assisting those with disabilities who could not evacuate on their own

Some people were saved during the earthquake due to this network.

Some people were helped by their neighbors even though the network failed to function.

→The disaster made residents realize the importance of building networks during peacetime.

“State-Intermediate Group-Individual” by Durkheim

two important points for interpreting Durkheimian problematic of “State-Intermediate group-Individual”

- <the problem of persistence of intermediate groups>
- the state as a general power must crush particular powers of intermediate groups and it leads to release individuals from the pressure of intermediate groups
- <the problem of absence of intermediate groups>
- intermediate groups are necessary to guard individuals from the powerful state which will oppress them if there are no intermediate groups



Chinese experience: the vanishing community?

Is the previous fudo disappearing?

- <Transcending Boundaries> Xiangbiao Bottom-up organizations and civil cooperation
- Normalization: community relationships playing a less important role
- Trusting your neighbor VS trusting the government



Chinese experience: the vanishing community?

HuTongs disappearing in Beijing

The tragedy of “大官片儿”

Roots of the culture of Xuannan(宣南)

Industrial upgrading

The shops inside communities under crisis

Wholesale markets being cleared

A transition between two walls



Chinese experience: the vanishing community?

- Losing cognition of “Nearby”——Xiangbiao
- Teens becoming more individualistic
- People who are not aware of nearby cannot describe faraway either
- People cannot escape dividualism
- Dividualism has to come back

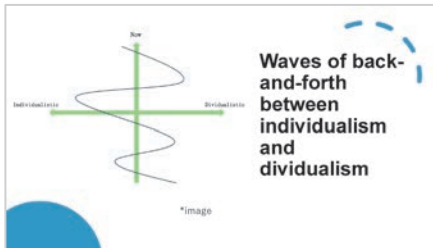


Chinese experience: the vanishing community?

- Reflection:
- The developing online society:Fudo breaking out of the geographic unit?
 - Individualism not only content of Fudo, but also switching the form of Fudo?
 - Internet fudo? Software fudo? media as fudo?
 - Can fudo really exist beyond real “earth”?
 - Is online society really a society? People merely expressing rather than communicating

Chinese experience: the vanishing community?

- Point one: Losing conscious of nearby?
- What exists around you still matters!
- Rather than becoming individual, maybe people are just developing a new term of dividual
- Point two: Is individualism really negative?
- Private space and valuable leisure
- Retired people naturally reform their community
- New understanding of Fudo?



EAA ユース生として、9/1(日)から9/5(木)までの約一週間、北京大学や東京大学の学生と一緒に仙台で様々な経験をすることができました。このような経験をすることができたこと、そして準備等に携わってくださった方々に感謝すると共に、活動報告書を書いていこうと思います。

9/2(月)

この日はまず松島まで向かいました。

道中、バスの中で自己紹介をしたのですが、北京大学の学生だけでなく私以外の東京大学の学生もみんな中国語で自己紹介をしており、積極性や言語勉強における努力がみられ、見習わなければとかんじました。

自己紹介の間や教授の説明は、隣に座っていた北京大学の女の子が通訳してくれたため、さまざまな専攻の人がいることや仙台の街並みについて理解を深めることができました。

松島では船に乗り、松尾芭蕉にゆかりのある地などの説明を受けながらきれいな景色を楽しみました。

北京大学の学生と話している間に、なぜ日本の船の名前には「丸」がついているのかや、同様に景色がいい場所は日本にたくさんあるのになぜ日本三景はこの場所が選ばれたのかなど、日本人の私でも答えられない質問をされ、毎度海外の方と交流する時に感じることでありますが、改めて日本に対する知識が足りないなと感じました。

松島でお寺などを見てお寿司をいただいた後、東日本大震災で大きな影響を受けた地である仙台市沿岸部を視察しました。

津波の水位がどれほどであったかが簡単にわ

かる方法として、松の枝が残っている高さまでだという話を聞きましたが、想定よりかなり高く、震災後に何度か高台をより高く作り直している必要性もひしひしと感じました。

このように都会で日常を過ごしていると実感しにくい、日本の自然の美しさとして脅威をより身近に感じました。

また、松林があることで内陸部への津波の到達が遅れ、30秒の差で外階段を駆け上り命が助かったと言う方のコメントを見て、震災時の一分一秒の状況の変化の認識や日頃からの防災・減災の大切さ、そして震災の脅威を後世に伝えるだけでなく知ろうとする私たちの意志の大切さも再確認しました。

9/3(火)

この日は北京大学の教授の講義を受けました。自分の専攻の経済以外の講義やさらには他大学の教授の講義を受けることはほとんどないので、とても興味深かったです。

「文明」や「風土」など、なんとなく普段使用している単語でも、実はさまざまな意味を含蓄しており、このような大きくぼんやりとしたテーマを学ぶことも面白かったです。

特に、より最近になるにつれ研究手法は発展していると感じていたので、過去・未来と時系列に沿っての比較だけでなく、同時代でもさまざまな「文明」や「風土」を比較するというように、どちらの比較も満遍なく行う研究が近代はあまり出来ていないという見方があることに驚きました。

その後はプレゼンテーションの準備を行いました。

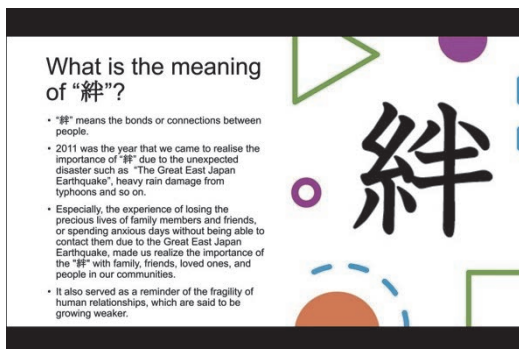
「風土」の講義の中で少し言及されていた、「Individualism or Dividualism」をテーマに、日本と中国の「文明」の変化を例に挙げて説明しました。

特に今回は東日本大地震の被害を受けた仙台での Summer Institute であり、さまざまな地を視察したため、日本の例では震災前後の Individualism から Dividualism への変化を説明しました。

発表の準備では、中国の「文明」の例は北京大学の学生に担当してもらいました。

準備の中で中国人から直接中国の街の変化を聞くことは大変興味深かったですし、また、自分の意見をしっかり述べることや体裁を気にするところなど、中国人らしいと感じるようなところもあり、楽しかったです。

発表についての反省は後述します。



9/4(水)

この日は発表の前に、魯迅にゆかりのある地を巡りました。

高校の頃に世界史の授業で「阿 Q 正伝」を書いた人ということは学びましたが、それ以上は知らなかったのが勉強になりました。

ただ、東北大学での展示ということもあり、東北大学在学中に関連する記録が多かった気がしたので、医者を辞め文学への道を志した後の活動も自分で調べてみようと思いました。

また、戦争の展示も見ましたが、ロシアとウクライナで戦争が起これたり、イスラエルが戦争をしている現代において、必ずしも日本で平和が続くとは考えられないので、そのような時こそ平和の大切さを再確認する場が誰にでも必要だと思いました。

そして、発表では自分の班の発表に対する講評に加え、他の班の発表を聞くことができ興味深かったです。

特に、日本と中国で記念碑の考え方や趣旨が違く、例えば日本では被災者を弔うためでも、中国では政府などを讃えるためといった違いがあることは考えたこともなく、新たな発見でした。発表の詳細なテーマが決まっていな分、自分達で自由に考えることができ、発表にも多様性があったので面白かったです。

自分の班の発表に関しては、少し懸念していた部分がやはり指摘されてしまいました。

教授に「風土」は Individualism と Dividualism を超えたもの(「over」)と説明したかったと指摘されてしまい、実際私たちの班でも「風土」というには Individualism と Dividualism にフォーカスしすぎてしまったと感じていたのが、反省点の一つです。

また、調べ始めてから気づいたことですが、「Dividualism」の意味も集団主義でなく分人主義だったりとさまざまな受け取り方があり、もう少し説明を加えた方がよかったかなと思いました。

普段とは違った多くの学び、新たな発見がある約一週間でした。

改めてありがとうございました。

“神”在我高中的教育中是很少被提及的语词，身边的同学往往也以“迷信”一带而过，“求神拜佛”在生活中似乎已经成了无所作为、不思进取的贬义词，“听天由命”也被视为对现实中努力的消极放弃。“神”似乎常是和“人本”相对的，对神的崇拜是对人自己力量和理性的不自信，在高中历史教科书的标准叙事中，文艺复兴、启蒙运动让人们从以神为中心到以人为中心，脱离宗教的桎梏，解放了人自己的创造力和实践力。但是，真的到了可以把“神”像枷锁一样挣脱的时候了吗？

研讨会上有同学提到，中国对于灾难的宣传更侧重人们如何齐心协力战胜灾难重建家园，以及灾难中的幸存者如何顽强地重获新生，而日本方面的宣传则更注重灾难本身：受害者的口述、对地方的破坏、对死难者的纪念。细细想来，确乎如此，甚至在中国的神话中，我们主要看到的也是面对灾难人们如何自力更生的故事，女娲补天、大禹治水、后羿射日、愚公移山，我们更加关注的是我们如何通过自己的力量战胜灾难，如何“我命由我不由天”。但是在日本对灾难的纪念中，人似乎并不被视作面对灾难的“胜利者”，很少有“人定胜天”的气魄和决绝。正如另一位同学提到的，日本人没有修筑高墙将大海与他们阻隔，而是立起“洪水止于此”的警戒塔将灾难的记录留在自己身边，没有寄往未来免于受灾，而是某种意义上在与灾难共存。

前数日，老师在日本思想史的课程上提到，他认为日本神话中不存在如基督教或佛教那样有绝对的神作为道德裁判，一切以一种不断推移的、自然而然推移的趋势呈现，这形成了日本文化中的“无常”观。上文由神话来推断国民性的说法也许武断，但仔细思考这些若有若无的差异仍不免让人感到震撼。在这个时代，我们每天都被教导如何踔

厉奋发，如何披荆斩棘，如何建立秩序，但是当秩序崩溃，面对一个无序的、随机的甚至荒诞的世界，我们有时并没有学会如何与之相处。当一切我们想到的手段都无济于事，也许，我们也只能从神明那里获取一份安宁与慰藉吧。

在仙台，神社和寺庙不像在北京那样往往建在郊区和深山中，而是就处在闹市里、处在大街小巷之间，人们上下班路上随时都可以参拜，甚至可以顺路捐一点钱币、求一个神签。在中国，去寺庙是节假日专属的活动，在日本大家自然未必日日赴寺，但是神确乎比我们更贴近他们的日常生活。其实，我们日常生活中，神从未离去，“穷苦倦极，未尝不呼天也”，在危险面前，每一句不经意间的“天啊”“上天保佑”何尝不是对神的崇拜的遗存。人们曾经以为可以通过理性去把握时代的规律和命运的轨迹，到头却往往发现，最理性的方法得出的却是世界无法用理性去认知的结论。面对这样的世界，当然不能说哪种心态孰优孰劣，但是在积极地想办法面对之外，承认人的渺小和卑微，学会与无常共存，对那无法捉摸的命运怀着一种虔敬的心态，也许能让我们更加泰然地接受我们现在的位置，相信某种意义上的天道和救赎，而不是像如今互联网上随处可见地以死意和发疯去看待身边的一切吧。

我们不能只是感受到人的力量，也应当去留意体察人的有限，这么做并不意味着放弃努力，而是在不应勉强的时候当退则退，不必事事做到极致，去接受一些失败和意外是无可避免的，要接受不是事实都可以通过吸取教训来防微杜渐的。没有什么制度设计可以绝对保证我们的安全。如今哪里发生了事故、哪里出了隐患，必定都要问责，要追求“零风险”，交通要追求“零事故”，这种努力本身当然没错，但是有谁能够保证万无一失？结

果是，乡村教师为了配合零事故的要求每天花大量时间在道路巡逻，耽误了正常的教学工作；生产过程为避免一切风险各种程序与审批日渐复杂，影响了正常的生产效率。很多问题之所以暴露，不是因为之前做得不够好，是因为在正常的生产生活节奏下很多事情根本无法预料。人们往往希望可以以为错误找到原因，找到可以避免下一次危机的办法，但是也许有时候根本无责可问，也根本没有必要问责。也许本段我走得有点太远了，仅作为一点思考的留痕吧。

面对不同的国家、甚至可能是不同的文明，很多时候我提示我自己要把我们想象成相近的人，相近的感情、相近的欲望、相近的关切，这样我们才能避免将彼此异化、相互理解。但是如此看来，我们和日本人思考问题的方式，也许确实存在着某种差异，潜移默化以至于无从感知，但是又润物无声以至于无所不在。那些时常被我们所关注的，中国人和日本人行为习惯的区别，仅仅是通过学习垃圾分类、污水处理这样的管理制度就可以弥合的吗，还是说，这果真恰恰是某种深层次东西在浅层的反映，它与神、与宗教、与我们两个国家的人们脑中世界、对宇宙、对使命、对意义、对无常有常、对此岸彼岸的想象，有关系吗？这些问题，也许还有留给未来去尝试回答吧。

最后以一位学姐在研讨会上的分享作结吧，在参观受难者的新居住区时，我只是觉得他们已经开启了新的生活，但是学姐告诉我们，对于很多当地日本人，海啸和地震是对他们家园的第一次毁灭，而随后的重建却好比对他们家园的第二次毁灭，在我们这里被视为新生活的重建工作却被给予了这样的形容，这是我始料未及的，而相比之下，也许组织受难者参加的集体祭祀活动这样的“精神重建”，更能得到大家的认同。人们忘记了神，人们抛弃了神，但是神却似乎终究是不能离开我们的身边。以我浅薄的知识，还得出进一步的认识和结论，仅仅经过数日的游学写下文字也终究是一些没有任何验证的猜想，不过，也许，至少我可以学会，对于神，对于我们不了解的一切，更多

地抱一些敬畏吧。



私は、EAA Youth 5 期生として、2024 年度 SI に参加する機会を頂いた。直後に控えた北京大学への留学のために、4 日目までの参加となってしまうが、極めて実りの多い経験となった。以下、時系列で私の経験を振り返り、今 SI の報告とさせていただきます。

1. 1 日目-出会い-

午後 4 時過ぎ、北京大側の参加者と東京大側の参加者が東京駅に集合した。9 月 1 日の東京は、北京とは違い、暦の上では秋であるということが信じられないほどに蒸し暑く、北京大生は皆堪えられないものがある様子であった。我々はそんな東京をあとにして、高まる期待と多少のぎこちなさを携え、はやぶさに乗り仙台に向かった。

仙台駅に到着すると、我々は早々に SI の間お世話になる宿へと向かった。宿の部屋は北京大の学生 1 人と東大の学生 1 人の 2 人が相部屋になるようになっている。私のルームメイトの北京大生は初め、英語で話しかけてくれた。それに私が中国語で返すと、驚いた様子で中国語で応答してくれた。3 月に浙江大学に行ったきり、中々中国語を喋る機会があまりなかった私は、中国語に不安を抱えていたが、しっかり通じたことがとても嬉しかった。

その後、ルームメイトの彼や他の北京大生と一緒に親睦を深める意味合いも含めて夕食へと向かった。日本が初めての学生も多かったようで彼らは街中の中国では見かけない漢字について色々質問をしてくれた。特に印象に残っているのは「多くの飲食店の看板に『放題』という文字は何か?」という質問である。思えば、日本

の繁華街は確かに「飲み放題」、「食べ放題」など「放題」で溢れているのであるが、和歌を主題から離れて詠むという少々奇怪な語源を持つ「放題」は中国語話者からすれば珍紛漢紛な言葉なのである。しかも「通常時間制限があり席で注文する」という語法を持つ「〇〇放題」は、「吃到飽」や「自助餐」というような中国語とも意味の範囲がずれているように感じられ、中国語に完全な対応語が存在しない。日中は同じ漢字文化圏であるとはよく言うが、よくよく考えると両者の言語には大きな隔りがある。当たり前ではあるがこれまで中々直面してこなかったこの事実に、改めて気付かされるような会話であった。

2. 2 日目-震災を考える-

2 日目、バスは 9 時出発だ。夜型の私は眠い目を擦りながらバスに乗った。我々の最初の目的地は塩釜港である。

塩釜港に着いて一番に目に留まったのは「マリゲート塩釜 津波避難ビル」と書かれたサインだ。震災の記憶、学びは一見して唯の美しい港に過ぎない塩釜港にも存在していた。東日本大震災以降、この地域はどのような気持ちでこの海を眺めているのだろうか、と考えられずにはいられなかった。

塩釜港から観光船に乗り、かの松島の景色を船に揺られながら見ている時にも、震災の禍根はありありと感じられた。ガイド音声の所々に「東日本大震災で形が変わってしまった」、「崩れてしまった」というような案内があったのだ。私は、芭蕉が感嘆した松島は、やはりこの松島とは少し違うのだろうか、と世の無常を感じなが

ら景色を眺めた。

昼食後は若林区の震災遺構群や浪分神社を訪れた。私は東日本大震災が発生した当時からこの地域のことを知っていた。私の苗字と同じ名前だからだ。しかも、東北地方出身の父曰く、これは単なる偶然ではなく、私の苗字の若林は伊達政宗がここに建てた若林城に謂れがあるらしい。13年もの間、強い縁を感じながら一度も訪れたことのなかったその地に保存された震災遺構はどれも痛ましいものであった。震災当時、東京にある私の実家は大きな被害を受けなかったが、テレビで見た津波、原発事故、パニックに陥る人々、避難民の生活の惨状などは極めて鮮明に脳裏に残っている。私にとってもある種のトラウマであり、正直に言ってそれは目を逸らしたくなる光景であった。地域の住民にも早く忘れてしまいたいから、遺構を見たくないと言う人は一定数いるであろう。思うに、こうした震災遺構の主たる対象は震災をよく知らない人々であり、そういった人々に震災の悲惨さを伝え防災意識を高めることが目的であろう。ではこの目的と、忘れてしまいたい人々の気持ちはどのように両立できるのだろうか。両立は不可能なのではないだろうか。この問題にすぐに答えは出せまい。しかし、忘れてしまいたい、という思いも、大事にすべきということだけは確かであろう。

3.3 日目-文明と風土-

3 日目は仙台メディアテークにて渠先生と張先生による講義が行われた。内容はSIのテーマにあるように文明と風土である。

文明 (Civilization) の概念は極めて多義的であり、簡単には捕捉しきれない。ヘーゲルが“On Civil Society”で語り、マルクスがもはや機能していないとしたところの文明は市民の同情能力に由来する共同体である。一方で、中国語で「文明停車」だとか「文明城市」という時の文明はマナ

ーや教養に近いだろう。風土の概念も同様であると言える。私は風土を地域に根付いていて人とその土地を結びつけるような、人為までも含めた生活環境を指すものとして理解しているが、日本語には「企業風土」と言うような用法があるのに対して中国語にはないなど、把握が難しい。

午後は、講義をしっかりと理解できただろうかと不安を感じながら明日のプレゼンテーションに向けてグループで準備をした。作業は夜まで長引き、しまいには営業終了のために作業していたカフェを追い出され、ホテルのロビーで準備を行うこととなった。険しい道のりであったが、言語の壁を超えて何とか形になった達成感とはとても大きいものであった。

4.4 日目-魯迅、別れ-

4 日目は私にとって最終日であった。午前中は東北大学など魯迅に縁のある地を訪れた。特に印象に残っているのは魯迅の学んだ、仙台医学専門学校の講義室、所謂「階段教室」である。江沢民国家主席も視察に来たことがあり、中国ではこの教室の黒板に名前を書き残すことがある種のステータスになっていると聞く。私は教室に置かれてある魯迅のノートの複製を眺め、とても感動した。達筆で完璧な文体の日本語でびっしりとノートがとられているのである。この時代の学生が、留学先で非母国語の授業を聞いてすることのできる所業とは到底思えなかった。きっとそこには並々ならぬ努力があったのだろう。北京大学に留学中の私は、録音した授業の音声を何度も聴きながら拙い中国語でノートをとる日々を送っている。魯迅を見習って、日々努力を重ねなければと思うばかりである。

発表を終えたのちは、いよいよお別れである。しかし、これがSIの終わりだという訳では決してないだろう。なぜなら、この4日間で得た出会いが、そして学びが、今後生きていくからである。その意味でこの別れは開かれた、希望に満ち

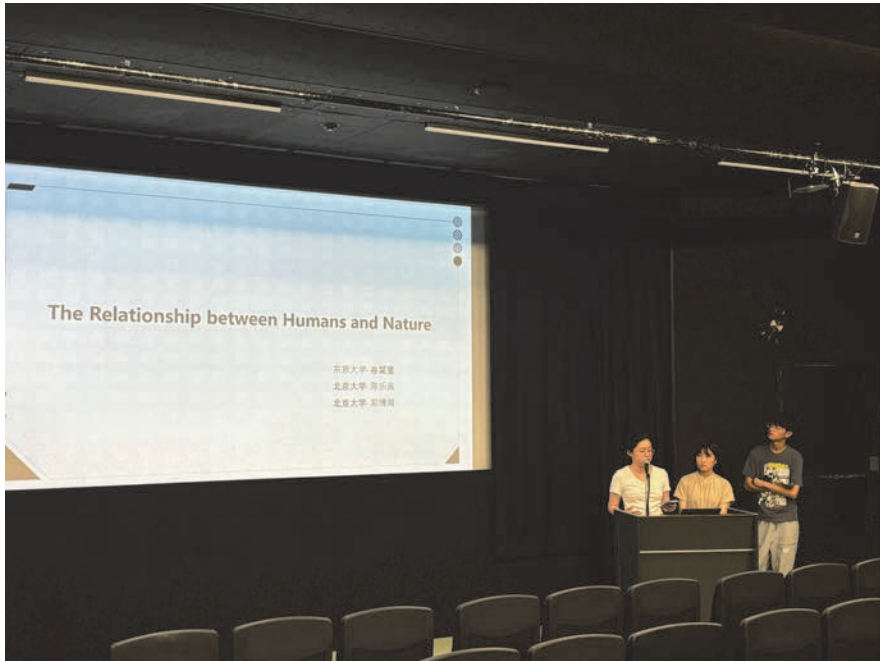
た、未来志向の別れと言える。

終わりに-その後-

現在私は北京大学元培学院の寮でこの文章を書いているが、先に述べたことは実際に現実になっている。SI で得た出会いが花開き、私の留学生生活を豊かなものにしてきているのだ。SI で親しくなった北京大学生とは今もよく食事や会話を共にするし、困った時には助けとなってくれる。また、SI でとてもお世話になった渠敬東先生の授業を現在受講しており、授業後には話を交わしている。

一方で、先行きには暗いものもある。つい先日深圳で日本人学校に通う児童が刺殺される事件が起き、日本と中国がまた揺れているのだ。北京の日本人会の催しも多くが中止になっており、不安がないかと言ったら嘘になってしまう。そんな今であるからこそ、日中の学生が心を交えたこのSIの重要性を心に刻んでおきたい。





Group2

Member

CHEN Leyan

陈乐言

Peking University

TANI Shiori

谷栞里

The University of Tokyo

ZHENG Bowen

郑博闻

Peking University

The Relationship between Humans and Nature

東京大学 谷草 達
 東京大学 岸谷 昌
 東京大学 杉博 剛

Relationship between Humans and Nature in *Climate*

- Nature gives gift to humans. Humans accept the gift and make use of nature. (the moonsoon type and the meadow type)
- Nature imposes violence on humans.
 - When the violence of nature is permanent, humans struggle to resist nature. (the desert type)
 - When the violence of nature is irregular and extreme, humans resign themselves to nature. (the moonsoon type)

Relationship between Humans and Nature in Chinese 'Fengtuji' s

Another type of relationship between human and nature:

- When the violence of nature is irregular and extreme, instead of resistance or passive resignation, humans adapt themselves to nature and try to coexist with the violence of nature.

Example

- Climate (describing India)
 - In general, apart from the few areas where there is a plentiful supply of water, the food of the household and the fodder of the animals depend on the moonsoon; whether it is late, whether it lasts its due time and brings its due amount of rain are matters of great moment. If the moonsoon is abnormal, then a bad crop ensues, bad enough to bring calamity. Anciently, there were famines whenever such frequent bad years occurred. In recent times, with modern transport facilities, such famines can be forestalled. But there is no remedy for the hardships of India's farmers. Malnutrition reduces the power of the body's resistance and plagues rage. (p25)
 - Climate shows that people can do nothing with disasters caused by irregular moonsoons, so they submit passively to nature.

Example

- 《高麗風土記》 (describing Cambodia)
 - 其他年年有雨，年年飽足。自四月至九月，每日下雨，午辰方下。淡水洋中，水浪高可七八丈，巨樹浮沒，仅露一砂耳。人家浪水而居者，皆移入山。后十月至三月，点雨即止，洋中仅可通小舟，深安不过三五尺。人家又复移下耕种者，则至何何植。是时，水可前至何处，随其地而播种之。
 - Facing the flood and drought caused by moonsoons, instead of resigning themselves to nature—refusing any action or resisting nature—struggling to change the nature, they change their own way of life and coexist with nature.

Relationship between Humans and Nature in Real Life

- When the violence of nature is irregular and extreme,
 - people submit to it.
 - people change their way of life to coexist with it.
- In real life, the relationship between humans and nature moves circularly between ① and ②.
- Living in a certain way to coexist with natural disasters according to the experience accumulated by previous generations
 - The unprecedented disaster strikes people. Lacking of experience and evacuation time, people can only submit to it.
 - Accumulating experiences from the formal disaster, passing experience on to future generations and developing a new way of life
- In this way, civilization — ways for human to being in the world — is developed.

"climate" says people submit to nature, to be patient in front of nature. (①)

However, from study about 2011 north east earthquake, we can also learn people continued to leaning and making changes to solve the problem of nature or disaster. (→②)

measures to solve tsunami (海啸) problem (before 2011)

Before 1933 (Meiji Sanriku Earthquake)

People even did not tsunami was caused by Earthquakes.



1933 Sanriku earthquake 三陸大地震 → firstly start to make the effort to solve tsunami problem (depend on experiences)


1976 Tokai earthquake 東海地震 start to focus the measures to prevent tsunami problem Including education, alert or hazard map

1993 Hokaido Southwest Offshore Earthquake 北海道南西沖地震 with 11m tsunami >4.5m waterbreak banks (堤防) were destroyed. Start to create high scale banks or buildings to prevent tsunami

The 2011 Great East Japan Earthquake.

Deaths and missing persons: The death exceeds 15,900 people, and the number of missing exceeds 2,520.

Evacuees: As of March 1, 2024, approximately 26,000 people are still living in evacuation shelters.



Economic loss: The economic loss caused by the earthquake is enormous, with insurance companies estimating the cost to exceed 35 billion US dollars.

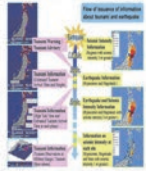
Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident: The cooling system of the nuclear power plant stopped functioning, raising concerns about the overheating of nuclear fuel and the leakage of radioactive materials.



After 2011

Since the Great East Japan Earthquake in 2011, Japan has implemented a series of measures to improve its tsunami response capabilities.

Japan Meteorological Agency's Tsunami Warning System:



The Japan Meteorological Agency (JMA) can issue a major tsunamis warning, tsunami warning, or tsunami advisory within about 3 minutes after an earthquake, and these warnings are issued by tsunami forecast area. If the earthquake magnitude exceeds 8, they issue warnings and advisories based on the maximum expected tsunami.

Strengthening Government Disaster Response:

To strengthen disaster response, the Japanese government has established the position of "Disaster Management Supervisor" to coordinate the central government's response measures and liaise with local governments. In addition, each ministry and agency ensures a personnel force of about 1,000 people to support disaster-stricken areas immediately in the event of a large-scale disaster.



2024.8.26

Thanks for your listening!

2024年9月1日至9月5日，我与北京大学和东京大学“东亚研究”项目的同学们一起，赴日本宫城县仙台市参加以“文明与风土”为主题的Summer Institute 暑期讲义活动。在松岛、荒浜、名取的实地考察，渠敬东与张帆老师的讲座，以及同学们的分组报告，都使我对“风土”的意涵、对自然与人类文明紧密交融的关系获得了更深刻的理解。

9月2日的实践参访行程中，海洋构成了我对当地自然环境的最初认识。无论是我成长的地方还是成年后求学的地方都是内陆城市，对海的了解仅有儿时与家人去海南度假的模糊回忆，而回忆中度假区的海温和而驯服，连同金黄的沙滩一起，被人为地分割、圈养，供游人娱乐。此处的海洋则截然不同。前往松岛的航行途中，我看见波涛白浪与岛屿奇石共同组成令人称奇的绝美景观，同时又反复摇晃、顶起和抛下船只，带来巨大的颠簸，在玻璃窗上留下暴风雨般的密集水滴。海洋的自然原始之威力、甚至可称为是蛮不讲理的凶暴本性，以及这种使人类在其面前显得渺小的强力与予人以美的极致享受的绚丽海景和哺育人类生命的丰富渔业物产之同源性，使我深受震撼。此地海洋的特质使我联想到张帆老师讲座的阅读材料——《风土》一书中有关季风的论述：季风带来丰沛的降水与热量，滋养季风地区的农作物，为人类送上自然的恩惠，但同时季风的运行又难以把握，常常偏离预测，带来极端的暴雨洪涝或是干旱，这些灾害是人类几乎无力抵抗的。西太平洋与季风一样，恩惠充盈又反复无常，哺育文明又毁灭文明，以两股方向相反的强大力量塑造着风土。

随后，在荒浜地区的震灾遗迹公园，我直观地感受到了海洋与地震结合所形成的大型海啸的强力，以及对人类生活的无情破坏。海水受房屋之间

的墙壁挤压，削过地面，留下近半米深的凹陷；房屋大部都已被卷走，只留下低矮的断墙，残余的生活用品还留在原地。在断壁残垣前震撼与敬畏的同时，当地人们长期与不安定的海洋共生的历史，以及2011年东日本大地震及其带来的毁灭性海啸之后人们重建生活的所作所为使我深思。震灾遗迹公园的讲解板显示，地震与海啸对东北地区太平洋沿岸而言并非偶然，有历史明确记载的最早的大型地震可追溯至公元8世纪，自1896年以来，引起海啸的地震每隔40年左右就会发生一次。当地的人们也在历史中积累经验摸索出了在变化莫测的海洋身边、震灾频发的大地之上的生存方式，例如历史悠久的浪分神社侍奉着掌管海浪的神灵，同时告诫人们不可在比神社更靠近海岸线的地方建造房屋；在大地震发生前，人们之中也流传着海啸不会越过运河的经验之谈。只是，一部分过于古老的经验被人们所遗忘，被记住的另一部分在2011年规模空前的大地震和海啸面前又过于脆弱无力，才使得大地震对这片土地上的人类造成了难以承受的破坏与伤痛。灾后，人们再次从创伤中总结经验、采取措施，建立高台避难所、修筑兼具阻挡海啸功能的高速公路，修建纪念碑与纪念馆来悼念亡者、保存灾难记忆。即使海洋之中隐含着撕碎城镇的危险力量，此地的人们始终不放弃与它共同生活、不愿抛下故土，一次次从灾害中总结经验，代代相传。

和辻哲郎在《风土》中曾这样论述：季风型风土中的人们对自然采取顺从、消极接受的态度，因为季风带来的暴雨洪涝、极端干旱等自然灾害的力量过于强大以至于无法抵抗，并且缺乏规律而难以预测。然而，在荒浜、名取沿海地区的见闻使我意识到，即使是面对如海啸这样极端而不可预知的自然灾害，人类与自然的关系也并非简单纯

粹的消极顺从、无所作为。人类在积极地采取行动，只不过这种行动不是如沙漠型风土中人对自然的反抗一样的对自然的改造，而是对自身生活方式的改造；既然无法使反复无常的自然适应人类文明，就塑造文明以适应自然。

上述想法在9月3日倾听了张帆老师的讲座后、为准备发表阅读讲座中提及的相关材料、以及与小组同学一同讨论选题时逐渐变得更加清晰。张帆老师的讲座主要讨论了中国古代一类名为“风土记”的文本，这类文本讨论远离中原地区的特定地域中的气候、物产、文化、制度等诸多方面，几乎涵盖了对特定地域所能描述的全部。其中，自然的特质与人文的特质往往浑然一体，或者说创作者似乎没有在概念上分离二者的自觉，与将自然环境与人类文明视为相互影响的两个独立主体的现代思想相区别。或许是上述中国传统的前现代风土观念的呈现，《真腊风土记》这样描述真腊（今柬埔寨）地区居民面对不规律的太平洋亚热带季风带来的暴雨洪涝与干旱的方式：“其地半年有雨，半年绝无。自四月至九月，每日下雨，午后方下。淡水洋中，水痕高可七八丈，巨树尽没，仅留一草耳。人家滨水而居者，皆移入山。后十月至三月，点雨绝无，洋中仅可通小舟，深处不过三五尺。人家又复移下耕种者，指至何时稻熟。是时，水可滄至何处，随其地而播种之。”暴雨洪涝之时，居民登上山地避险；旱季再回到田地，耕种作物。这段文本所呈现的人与自然相处方式同样是人积极的改变自己的生活方式，以适应变化莫测的自然；或者说，在作者的眼中，当地的季风气候与地理环境理所应当与这种生活方式结合。然而，作者将人与自然视为整体，也意味着轻视甚至忽略人与人之间的矛盾；即使人类总结出各种经验、改变生活方式以适应无常的季风，仍然不可能永远与自然和谐相处，当不规律的自然环境带来超越人类经验的空前自然灾害时，缺乏改造自然的手段与应对的时间，人们必然会受其伤害，显得束手无策、只能消极顺从一般；然而，人类文明独有的特性是能够在历史长河中代代传递经验和知识，从灾害

的创伤中总结的经验教训能够化为习俗、知识或新的生活方式，成为后代遵循的传统，直到无常的自然带来新一轮的变局；人类文明在风土中演化的历程，大约正是如此。

第一次踏上日本的国土，驻留之处不是国际化都市东京，而是东北地方的仙台市，他人、甚至是最初的自己可能会感到遗憾或不可思议，而经历了暑期讲义之后的我却为此感到幸运。不仅是因为我在这座城市追随到了鲁迅求学的足迹，而且是因为这座城市与此次行程将“风土”的意义鲜活地传授予我。它存在于凶猛得使人感到陌生的大海和松岛鱼市的生鲜菜肴中，存在于震灾遗址的大地上，也存在于从车站开始纵贯市中心的商店街，傍晚时分，中学生和上班族身着各自的制服组成熙熙攘攘的人群从这里经过，如同血液流过城市的心脏。上述鲜活的认识由我们驻足的这座城市、北京大学与东亚艺文书院的各位良师、参加暑期讲义的所有同学、讨论发表的选题时越过语言障碍激烈碰撞的思维火花以及诸多无法枚举的瞬间共同组成，于我而言，是一期一会的珍贵回忆。想必这份回忆将连同此行收获的知识、困惑、感情，在我的生命中刻下印记。



今年の Summer institute が仙台で開催されると初めて聞いたとき、なぜ仙台なのだろうかという疑問を抱いた。仙台は確かに東北地方の中心地ではあるが、京都や東京のように、大衆受けする日本らしさを感じる場所ではない。また北京大学の学生に日本の魅力を最大限知ってもらえるような特徴があるわけでもないとも思っていたからだ。しかし今回の Summer institute を通じ、仙台という場所でしか学べないことがあるのだと強く感じている。全体を通じて非常に充実した活動であったが、今回の報告書では特に印象が強かった東日本大震災、鲁迅と東北大学、の2項目について書く。

まず東日本大震災について。私は大学生になってから3回東北地方に行き、そのうちの2回で震災学習の機会を得た。ゆえに自分が震災の被害を直接受けたわけではなかったものの、今までの学習を通じて震災に対する知識をそれなりにもっているつもりではあった。しかし今回の Summer institute での学生の発表やディスカッションを受け、東日本大震災についての自分の理解はやはり全く足りていないと感じた。

今までの3回の被災地訪問で受けた印象は毎回異なっている。1回目は宮城県石巻市立大川小学校を訪問し、教員と児童合わせて84名が死亡したまさにその場所で児童遺族の方の話を聞いた。遺族の方が当時の教員の過失を語り憤る様子を見て、私も悔しく悲しい、どうしてこんなことが起こってしまったのか、と非常に単純に感じたことを覚えている。2回目は大きな震災被害を受けた福島県いわき市の中学生に勉強を教えるボランティアに参加した。地元の中学生と交流する中で一番印象強く感じたのは、大都市圏

から遠く離れたこの街に住む中学生と、普段東京大学で接する学生がもつ教育資本の格差である。地元の中学生は非常に無垢で熱心だったが、彼らが教育資本の豊富な大都市圏の中学生と同じ土俵で勝負するためには、非常に高い壁を乗り越えなければならないのだろうと感じた。

この2回の被災地訪問は、震災のことを本当に理解したいというよりは自分の経験を増やしたいという思いが強く、そのような下心があった点で関わって下さった遺族の方や中学生たちには非常に申し訳ない。しかし今回の被災地訪問や震災学習では、初めて純粋に震災について受け止めたような、また今までの学習が全て線となってつながったような感覚を抱いた。

4日目のプレゼンテーションの際、私は地震研究や防災の歴史について発表し、技術はどんどん進歩し、防災意識もますます高まっているからいつか地震の問題は解決できると述べた。その後のディスカッションで、技術は本当に唯一の解決策なのかということ、そしてなぜ人々は震災が起こる可能性のある場所、震災が起きた場所に住み続けるのかという疑問を石井先生が提起された時、私はふと名取市震災復興伝承館に展示されていた街の模型を思い出した。それは津波が襲う以前の街を小さなレプリカで再現したもので、家々の側にはかつてその場所に住んでいた人の名前が添えられており、まだ未完成であった。なぜ被災した街を恋しく思うのか、模型の形でも残しておきたいと思うのか。街というものはそこに存在した人々の暮らしや思い出を全て吸い込んでおり、その場所を故郷とする人々にとっては唯一無二の存在なのだろう。震災復興伝承館の内部、模型の街の隣の部屋で

は東日本大震災当時の津波の映像が流れており、圧倒的な津波の力で街全体が流されていくのを見ると涙が出た。大川小学校児童の命を奪った震災の大津波は名取市の人々も飲み込み、生き残った人々も当時は多く市外に流出したと聞く。津波の映像は何度も見たことがあったし、この震災復興伝承館にも以前訪ねたことがあるのだが、震災のことで泣いたのは初めてであった。

津波はそこに住む人々にとってはかけがえのないまちを不可逆的に破壊したが、名取市の街の模型などを見ていると、人々の観念上にある愛しい故郷とは、物理的な建物や外観を越えたものなのだろうと強く感じる。それゆえに、津波が発生し得ない別の場所に被災前と全く同じ街を作ったのでは意味ないし、福島県いわき市の中学生やその家族がいわき市に住み続けるのは、もちろん仕事や経済的な理由があるとしても、いわきという場所はその人々にとってかけがえのない「故郷」であるからなのだと感じた。この「故郷」という観念は、多くのチャンスを掴むために都市へ都市へと進むことを目指す自分のような人にとっては非常な神聖さを帯びたものであった。

また「故郷」といえば魯迅の代表作の一つであるが、東北大学を訪問し、魯迅に対する理解を深めたことも大きな収穫であった。この報告文を書いている現在私は北京大学に留学中であり、東北大学へ留学していた魯迅の一億分の一ほどのスケールではあるものの、勇気と緊張をもって日々を過ごしている。魯迅は戦時色の色濃かった当時、東北大学で唯一の中国人留学生としてどのような気持ちだったのか。魯迅が文学者になることを志したと言われる「幻燈事件」に関する文はいつ読んでも胸が痛むが、実際に魯迅が授業を受けていたという階段教室の窮屈な椅子に座ると、あの階段状になっており少し圧迫感のある空間で、日本人学生に挟まれて勉学に励んでいた魯迅の気持ちが少しだけ分かる気が

した。私は当時の魯迅の体験に深く共感するような経験と知識をもち合わせていないために多くを語ることはできないが、Summer instituteの終わりに張政遠先生がおっしゃった「日本の大学生と中国の大学生がともに魯迅について学んでいると魯迅が知ったらどう思うだろうか」という旨の言葉には深く感動した。魯迅の「故郷」は日中関係ではなく身分格差の話であったが、話の最後は主人公「僕」の「希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない。これはちょうど地上の道のようなもの、実は地上に本来道はないが、歩く人が多くなると、道ができるのだ。」という言葉で締めくくられる。EAAのプログラムのように中国と日本で学术交流ができるようになったのは、「僕」の下やそのまた下の世代の人々が努力して中日交流の道を開いたからなのだろうと思う。



写真で見た津波に襲われた街は、爆弾が落ちた後の街によく似ていた。東日本大震災の被災地は次第に復興してきており、バスの運転手の方の話によると人口も回復しつつあるらしい。地震も戦争も、人々にとって大切な何かを決定

的に破壊することには変わりはないが、被災地も戦災地もやがて復興していく。重要なことは、浪分神社の存在が示すように過去の教訓を忘れないことであり、それでいて前に進んでいくことであり、そのために必要なのは必ずしも技術ではなく、説明することはできないが、何か観念上にある大切なものなのかもしれない。



仙台五日

ZHENG Bowen 郑博闻

Peking University

是坐着新干线来到仙台的，出站的时候，云很漂亮。

晚上和新认识的朋友一起去吃了汤咖喱。更晚的时候我又回到了仙台站，这里有《偶然与想象》的取景地之一。在十几天之前，我就在看这部电影。

第二天坐船去松岛，松岛是日本三景之一。在游客中心，还看到了松尾芭蕉的雕像，松尾芭蕉曾来到这里，留下了“島々や干々に碎けて夏の海”等优美的俳句。船在海上行驶，广播里也是松尾芭蕉的俳句。我先是在甲板上，甲板上都是东亚项目的老师同学，人影在海浪上浮动。然后我去了船舱里，东大的朋友为我讲解广播的内容，我也第一次了解到了松尾芭蕉的俳句。



然后船靠岸，我们来到了青龙山瑞严寺，瑞严寺里面有博物馆，里面有各种文物，我很喜欢里面的画作。进寺庙里面是要脱掉鞋子的，脚踩在木制的地板上，看着庙里面的神像。走出瑞严寺的时候，被售票窗口里的工作人员叫住，原来是我买票的时候西瓜卡掉了，他们对着监控找到了我，我点点头，十分感谢。之后去了一个海鲜市场，吃寿司，寿司上面是各种各样的生鱼，我对侧坐着渠敬东

老师，渠老师说话平易近人，在老师旁边也没有压力。我还是吃不太惯生的东西，不过的确是很新奇的体验，红茶也很好喝。然后老师请我们吃了牡蛎。我之前只在《我的叔叔于勒》里面听过牡蛎，似乎也看过一个主人公和父亲十分饥饿，穷困潦倒，最后吃到了牡蛎的短篇。不过我之前还没有吃过。烤的牡蛎，感觉和其他贝类差别不是很大。

下午我们先去看了浪分神社，纪念东日本大地震的神社，据说当时海水正好蔓延到这个神社门口，然后去看了一所小学，坐在车里远远地看。也是在东日本大地震震区里的小学。然后是遗址公园，断垣残壁，我对海啸的威力感到震惊，钢筋混凝土尚无法抵挡，这里已经没有完好的建筑了，甚至连地面上的残留都不多。这里离太平洋很近，过了堤坝就是，现在的海洋，风平浪静，缓和的表面之下，是下一次喷薄的可能。我们之后去了纪念馆。在最后的 presentation 里，有位同学提出了“我们为什么要纪念”的问题。我想我们当然要纪念。灾害是人类的灾害，没有一个遇难者应当被忘却。我们此时的纪念，是对他们在天之灵的慰藉，也让我们时时保持危机意识，减少下一次灾害发生时的损失。我们最后去了一个雕像，雕像是“芽”。象征着新生和希望。被灾害摧毁又重建，重建的当然不是原貌，这片区域现在成了公园和烧烤的地方。人类确实在慢慢适应自然，适应它的风雨雷霆。在这一过程中，人类也更加有韧性。

时间来到了第三天，上午是两位老师的讲座，渠老师对社会学作了一个整体上的阐述，而张帆老师则从文明与风土出发，探索风土的意义。中午我们小组一起去吃了饺子，这家店的饺子是没有上层的，如果把饺子当作长方形，它就只有两个侧面和底面。很好吃，和中国的一样好吃。下午我们就准备 presentation，我们辗转了两个咖啡厅。

然后在酒店大堂坐到半夜，才算完成。中间还在一家东南亚餐厅吃了晚饭。

这次活动，最让我难忘的是交流，和很多人的交流，确实是开阔眼界，是自己之前从未听说的东西。在吃饭时的交流，在行路时的交流，每一次都让我感到世界的广阔和多元，也让我更加热爱这个大象万千的世界。

第四天就是展示以及分别的日子。我们去了东北大学史料馆，主要是去看鲁迅纪念展示室。路上还看到了鲁迅先生的雕像。展示室不大，但是很细致，从鲁迅入学到离开仙台。东北大学人才辈出，然而史料馆里，只有鲁迅先生有自己的展示室，足见东北大学对鲁迅先生的尊敬。之后还去了鲁迅先生曾经的教室，我们坐在鲁迅先生坐过的地方，心里是对先生的怀念。

然后去参观仙台空袭纪念馆，战争比自然灾害还要恐怖的多。人们惶恐的躲在防空洞里，12961枚燃烧弹和911.3吨燃烧集束弹从空中落下，仙台成为火海。下午就是 presentation 的时间，我们组的题目是人与自然的关系——以东日本大地震为例。我们发现在《风土》中人和自然似乎是敌对的，自然灾害一次次打败人类。而在各种风土记里，人和自然的关系似乎更加和谐，人会去适应自然，和谐共生。我做了东日本大地震后的灾害防治，日本在海啸灾害预警等方面很有经验，许多技术都在世界前列。我在展示的时候，因为自己的英语可能不太流利，有些羞怯，非常紧张，头一直低着，甚至我自己都没有意识到。可能是因为第一次在这种场合下说英语。晚上就要和三位东大的朋友分别了，他们要回东大，准备来北大交换，也和我们住一栋楼，虽说如此，分别的时候还是不舍。晚上我们一起去吃了韩国料理。之后我和顾斌瑞去了仙台城遗址。

仙台城遗址地势比较高，可以清楚的看到整个城市的夜景，灯火点点，十分壮观。我们还看到了仙台市的建城者——伊达政宗的雕像，一致认为它底下的灯布置的恰到好处，让雕像更加雄伟。回去的时候，我们走在漆黑的路上，人行道很窄，旁

边是铁丝网，上面写着“熊出没”，不过我们到最后也没有看到熊。时不时有车从身旁呼啸而过，路上只有我们两个人，远方的摩天轮和漫天的繁星。第五天，一大早就从酒店出发，去仙台站坐新干线回东京。列车驶过，城市一个个被落在身后，这趟列车载着对仙台的回忆，回忆里有博学平和的老师，热情友善的同学，以血荐轩辕的鲁迅先生，在东日本大地震受灾的人，在仙台空袭中遇害的人，我将怀揣着欢喜、崇敬与痛惜，来纪念这仙台五日。





Group3

Member

GU Binrui

NAKAI Hiromoto

XUE Yi

顾斌瑞

中井博元

薛奕

Peking University

The University of Tokyo

Peking University

Disaster memory and post-disaster reconstruction

Group 3
Hiromoto, Yi, Binru

Nami-Wake Shrine (Wave-Breaker Shrine)

- Disastrous earthquakes and tsunami occurred in 869 and 1611
- The God of the Sea rides a white horse, cutting through the tsunami's waves and halting their advance
- Tsunami washed away the farmland
- Tenp # famine kicked in
- Moved 500 meters away from where the shrine was first built, farther from the coast

<https://www.nami-wake-shrine.jp/>
<https://www.mbl.or.jp/sanji/sakura/2010/kyogofu/syokufu03.html>

Kahoku Shimpo

- A 73-year-old resident nearby said, "I didn't know about the shrine, but I had heard there was a tsunami."
- A 69-year-old local remarked, "The story of the tsunami and the shrine isn't well-known or widely discussed."

http://memory.eea.jp/tsunami/tsunami00_003.html

Double Layered Town

- Duality: the lower town before the tsunami occurred, and the reconstructed upper town
- A man, holding his son's hand tightly, says to the movie's director, "Remember the lower town. Lower town holds you up high, to where you and I are now."

映画「津波に沈んだ町」の出来事
—東海（津波）の記憶—

- Some people lost their loved ones to the disaster: some lost their homes and workplaces; others lost their hometown. Now, to rebuild the neighborhood, everywhere has been reconstructed and made brand new, with a monument inscribed with the occurrence carved into stone.
- Their loved ones, homes, workplaces, and hometown, are somewhere else, not where the monument locates.

- After the Nami-Wake Shrine was relocated during the Tenp # famine, the story of the God of the Sea and the lesson about tsunami gradually faded, to which people barely remember what the Nami-Wake Shrine symbolizes.
- To recover from the Great East Japan Earthquake, high barriers were constructed, and new houses were relocated to higher ground. A monument was built in the upper town, but people's memory and their loved ones remain buried in the lower ground.

Disaster memorialising: a universal phenomenon



[Anathema.com](http://anathema.com/)

- The Old Testament: The Flood
- Lisbon earthquake (1755)
- The Lisbon Question
- The 2011 earthquake of the Pacific coast of T # hoku
- Ways of archiving and memorialising in Sendai
- ...

Questions

- Why is disaster memorialising always happening?
 - We human always sincerely preserve our memories of disasters.
- Do we really need to keep our memories of disasters?
- Why, and how?

Why is disaster memorialising always happening?

- Because it makes people feel better.
- Humans instinctively feel that memorializing disasters is beneficial to them.
- It's humanity.

Do we really need it? Why?

- Yes, we do.
- Why?
 - We need to figure out the function of disaster memory, of memorialising disasters.

Disaster risk reduction (DRR)



- Earthquake
- Records
- Lessons & traditions

"The role of archiving and memorializing disasters in disaster risk reduction"
<https://www.india.inhaku.ac.jp/wp-content/themes/APRU-RED/5/eng/eng16/2015-rehab-lectureford.pdf>

Disaster memorialising

- Disaster memorialising is important because it is the way we warn our future selves.
- It looks simple, but actually it's only explicit after a new disaster happens.
 - E.g. (Haruki Murakami): Fukushima nuclear leak
 - "We should have taken a national perspective, pooled our technical capabilities, gathered a wide range of ideas, invested social capital, and sought to develop alternative energy sources to nuclear power. Even if the world really is saving. There is no more efficient energy source than nuclear power. The Japanese who abandon it are fools, the 'nuclear allergy' brought about by our experience with atomic disaster should have remained uncompromisingly preserved. Developing such nuclear energy should have been a central issue for post-war Japan's development."
 - All of these should have constituted a collective responsible attitude towards the many victims of Hiroshima and Nagasaki. Japan needs such sound ethical standards and societal norms. This should have been a great opportunity for us Japanese to make a tangible contribution to the world. However, in the midst of rapid economic growth, we became fixated on efficiency as a simple criterion and lost sight of more important decisions."

"Unbearable Dreams", Haruki Murakami

和辻哲郎《风土》

measures for securing enjoyment from it. The same may be said of the summer heat or disasters such as storms and floods. It is in our relationship with the tyranny of nature that we first come to engage ourselves in joint measures to secure early protection from such tyranny. The apprehension of the self in climate is revealed as the discovery of such measures; it is not the recognition of the subject.

The role of disaster and post-disaster

- Political culture: Disaster(灾祸) with Divination(祸祥)
 - 《清华·朱东润与政治：灾祸的政治文化史》：“Everything is related to each other” → “The tool for scholar-official to restrict monarchical power”
- Resources for social mobilization
 - Karl August Wittfogel; Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power
 - Elizabeth J. Perry; Rebels and Revolutionaries in North China, 1845-1945; "Survival strategy" theory



Difference in the construction of memories

- | | | | |
|--|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • Japan: <ul style="list-style-type: none"> • 1923關東大地震 • 1995阪神・淡路大震災 • 2011東日本大震災 • Collect disaster memorial materials • Support disaster oral survey • Build memorials for the victims • Set up religious statue | | <ul style="list-style-type: none"> • China: <ul style="list-style-type: none"> • 1976唐山大地震 • 2008汶川大地震 • The care from the government and the whole country • "Anti-earthquake" monument • The walling wall | |
|--|--|--|--|

http://www.fdma.go.jp/html/01/saigai_dennyu/

Difference in the construction of memories

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • Japan: <ul style="list-style-type: none"> • the sufferer • Prevent the fading of disaster memory • Improve the awareness of disaster prevention • Relieve the mental trauma of the victims • A feeling of human weakness | <ul style="list-style-type: none"> • China: <ul style="list-style-type: none"> • the rescuer and the survivor • The connection between people and government • The strength of the government • The heroic and dogged spirit of rescuers and survivors • Man will conquer nature • Dry your tear, cheer up and move on |
|--|--|

Question

- What should we learn from disaster?
- What kinds of disaster memory do we need?
- How should we imagine the role of the government, the individual and the others in a disaster?
- Is there a disaster narrative leads to harmony between human civilization and nature rather than one overpowering the other?

Thanks for listening!

2024年8月底，我一个人来到东京，预备参加东京大学和北京大学合办的东亚项目的暑期集中讲义。三个月之前——六月底，我偶然见了暑期集中讲义招募学生的通知，一看有机会跟着老师们和同学们一起去日本，就欣然报名参加了。我之前的寥寥几次出国经历，虽然时间都很短暂，但是都给我留下了非常深刻的印象，于是报名参加的时候，我便对此次日本仙台之旅充满了期待。

8月29日下午，我到达了东京羽田机场。日本对我来说是一个完全陌生的地方，但是东京不是，因为我已经在很多文艺作品里面见过她。走出算不上人满为患的东京地下铁，我一个人拖着大箱子，站在了东京城的地面之上。那天天下着小雨，天气有点阴冷，不染纤尘的街道映在路旁的大厦光可鉴人的玻璃窗上，显得惨白。工作日白天的东京，街道上好像一个人也没有。偶尔走过一个两个举着透明长柄伞的西装客，竖着衣领，背着书包，厚厚的镜片下低垂的眼睛，看不见黑色。这座城市好像死去了，哦，是死寂一样地睡着了。

几个小时之后，当我出来吃晚饭的时候，一切就都不一样了。雨下得更大了，但是街道上出现了很多行人。成群结队的人。哦，不，只有结队，没有成群。窄窄的人行道上，行人们不约而同的选择沿着自己的左手边走；一排排白色的透明雨伞，谁也碍不到谁，沉默着，摇曳着。大部分人的目的地是地下铁新桥站小小的入口，人群在这个小小的洞口好像慢了下来，一点一点的挪动着、挪动着，像压制的沙丁鱼罐头，又像生产速食酱肉干的流水线。街道上静得出奇，或者说，人群发出的声音完全匹配不上它的体量。渐渐黯淡的天光下，一片艳红浸染了远处的白云。五颜六色的霓虹灯闪亮了起来，静静地注视着走走停停的车流，和停停走

走的人群。

东京人礼貌得惊人。酒店前台接待客人的店员，目送着我走进电梯，在电梯门开始缓缓观赏的时候，深深地鞠了一躬，直到两扇电梯门之间只剩最后缝隙，他仍然维持着九十度躬身的姿势。服务业从业者如此，路上遇见得行人也是一样，商场里，第一个走进电梯得永远最后一个走出来：他会一直站在电梯按钮旁，随时准备按住开门和关门的按钮。

EAA的助教学姐也是一样。我从酒店赶往新干线站台的路上，不幸遇到了倾盆暴雨，到达预定的集合地点的时候，大部队早已前往候车站台。我气喘吁吁地来到入站口，正要原地摆烂开始作无助地张望，学姐就在里面微笑着叫我进去。她在这里等候多时，一眼就认出了我穿的衣服。我跟着她走，很惶恐第一次跟将来的日本朋友们见面就迟到了，可是她表现得好像我没有迟到一样，不急不徐，毫无愠色。这反而让我更惭愧了。

仙台和东京不一样。东京很大，大到让初来乍到的旅客无所适从，不得不对着一篇又一篇的旅游攻略努力研读，为短短的两天时间安排合适的行程。仙台很小。但其实也不小。仙台小到恰好可以细细地用脚步丈量夜幕降临的市中心，也可以悠闲地坐地下铁去城外的山上古迹或是另一边的博物馆、美术馆。深夜里，当商场和店铺都已经打烊，条条小巷就开始焕发活力，各式各样的居酒屋悄悄地打开了门扉。如果在东京，这样的小巷对一个旅客来说，是万万不敢踏入的地方；但是在仙台，尤其是中央车站附近这样的地方，柔和的黄光打在地上，本地人或是外地人，上班族或是无业者，居民或是旅客，成双成对或是独自一人，大家安安静静地就走了进去。到不了很晚，居酒屋们就又歇

业了，店主在门口立起谢绝顾客的牌子，静静地等待最后一个顾客用完餐食而离去。大家白天都还要上班的。



图中我们在看海。

仙台的行程和东京也不一样。我们坐上大巴，转乘游船，去看岛上的神社，去吃海边的寿司。我们去看了东日本大地震时仙台遭受的海啸之灾的遗址。灾后，那一片地区都没有重建，而是保留着一些原样的受灾的破烂房屋。或者这是因为，很久之前，这里曾经遭受过另一次海啸，这里的人们不久后又迁回来居住了，但是多年后很多人又遭受了第二次海啸的袭击。或许只有这样才能让人们记住吧。

即便如此，现在还是有很多人想要回来，回到养育他们的地方，继续居住。这里对他们来说，是与其他地方都不一样的风土。风土，中译英叫“fengtu”，日译英叫“fudo”，大意相同，但是有细微的差别。但是我很惭愧，没搞懂差别在哪。来自北大的渠教授和张教授分别给我们各讲了一堂课。渠老师的主题是社会学理论，而张老师的主题正是风土。讲课时，张老师流利的英语和漂亮的ppt令人赏心悦目，但是恕我没完全听懂她想表达的意思。做小组pre的其他同学好像也跟我一样：有一组同学讲完他们的部分之后，张老师甚至不得不亲自站起身向他们解释，自己讲座的含义。不管怎么说，两位老师的授课还是十分精彩的。绝大部分同学都认真的在听，在记。只是，两堂课加上一个下午，这样的时间对于一次 presentation 来

说，实在是太过短暂了。大多数组都没能做出很有深度的东西。我提出了一个问题，甚至引起了一波不小的讨论，哈哈，但是引起大家注意的其实是我对于灾难和灾后重建浅薄的认识。难为东大的张老师贴心的给我们科普，也难为北大的孙老师在最后发言的时候特意提到我的问题。



夜探仙台城旧址，俯瞰仙台。

写到这里，正好两千个字，于是我不想继续写了。能写上去的，还有很多：火车上就认识了、之后的旅程里一直在帮助我的南博元同学，感激不尽；可爱的艺文书院院长，可爱的东大的张老师和北大的张老师；可爱的渠老师和可爱的若林同学之间的友谊。还有山边的岛，海里的山，水边的大石头和神社里的高高的杉树。还有抹茶冰激凌、不放酒精的葡萄酒和南博元同学和我都没吃到的铜锣烧。

还有鲁迅上过课的阶梯教室。原谅我不想在这篇报告里抒发对它的情感。

我很喜欢仙台，也很喜欢东京。我感觉，我喜欢上了日本，比之前在书籍、影视和网络上看到的日本更甚。希望以后能有机会再和 EAA 的大家相见。

2024.9.11

于北京大学 35 楼地下室

NAKAI Hiromoto 中井博元
The University of Tokyo

From September 1st to 5th, I attended this year's EAA Summer Institute, themed "Civilization and Climate." The essay serves as a reflection and a way to reminisce the intensive yet brief five-day session, which was a joint program with Peking University in China. During the five days, I shared a room with Bowen and collaborated with Binrui and Yi on discussions and presentations. It was my first time living, studying, and working, all-together, with students from Peking University, and it has been a truly memorable experience.

MATSUSHIMA AND MATSUO BASHO

The first place we visited after arriving in Sendai was Matsushima Island. Professor Cheung told us that, poet Matsuo Basho also visited the Matsushima Island on a bright summer day, and our boat followed the same route that he once took.

When I learned about haiku, I discovered that it is the shortest form of poetry in the world with a set structure. "All those islands! Broken into thousands of pieces, The summer sea." (Translated to English by Lan Hideo Levy, One of Matsuo Basho's poems).

Lan Hideo Levy, a contemporary Japanese-language novelist, paraphrased the haiku, posing a metaphor for all the islands in which protagonist sees from the airplane. Professor remarked that, when poet Matsuo visited the island, he didn't consider the island inspired him to compose much haiku, leaving behind only one haiku about

his boat journey. Perhaps the sea and the dispersed islands were much worth seeing than the main island, where we enjoyed sushi.

ARAHAMA ELEMENTARY SCHOOL AND NAMI-WAKE SHRINE

In the sophomore year of college, the story about the Arahama Elementary School was brought up. Arahama Elementary School functioned as an evacuation site during and after the Great East Japan Earthquake. Students, teachers, staffs, and people residing nearby evacuated to Arahama Elementary School. Though the tsunami was threatening enough to reach the second floor of the building, the building held intact and all of the evacuees were found safely, in the end.

After the earthquake and the subsequent recovery, Arahama Elementary School has become an exhibition site, serving as a place to document and teach younger generations about what happened there. Unfortunately, Arahama Elementary School didn't open on Mondays, and we couldn't enter the school. Yet, I have taken a picture, shown below.



The City of Sendai preserved a precious photo, showcasing the top-floor's image during the tsunami and the Great East Japan Earthquake. By comparing the two pictures, we can deduce the severity of the tsunami and why we praise about the Arahama Elementary School.

The picture taken by the City of Sendai shows the situation of the tsunami, and there were a lot of evacuees on the rooftop.



City of Sendai (2011)「津波で孤立する荒浜小学校」 Accessed 12 September 2024, <https://www.city.sendai.jp/shiminkoho/shise/dai-shinsai/zenkoku/photoarchive/engan/009.html>

Next to the Arahama Elementary School, Nami-Wake Shrine was another spot that we visited. Nami-Wake Shrine was originally named after a tale, in which the god of sea parted the tsunami, splitting the waves in half and preventing the waves from advancing beyond the shrine. However, the tsunami ruined the lands, and following the Tempo famine, the land could barely harvest any crops. The records of the history can sometimes be complicated and uncertain, and there is a saying that, the shrine was relocated 500 meters from its original site, and the shrine's deity was changed to another god to pray for the end of famine and for a good harvest.

In the presentation, our team have discussed why and how people remember the

disaster. I have proposed a plausible explanation why people forgot the lessons inside the Nami-Wake shrine, after the change of god and the purpose of the shrine, local elders, not mentioning the young generations, forgot what the shrine stood for — more and more houses were built nearby the coastal regions, and we have seen that the houses were teared apart and the parts remained on the ground distortedly.

The location and the god changed, hence people forgetting the Nami-Wake Shrine. Then, I drew a comparison to the memorial. The monument usually is in somewhere other than the lost-place, where people lost their homes, the loved ones, and where their past were buried. People don't know where to go back to, whether the monument or where their lost-ones were buried.

The Arahama Elementary School was different, since the facility serves as an exhibition site to showcase the history and the lessons of the Great East Japan Earthquake to the 'outsiders.' Yet, the monument is for both insiders and outsiders: people being evacuated return to hometown some times of the year and visit their lost-ones here; people who are unrelated to the earthquake come to the monument to sightsee and to learn other people's grief and their history.

However, the facilities for the outsiders often deviate the location of lost-ones for insiders.

To echo the discussion, I argue that we should think about the duality of the town when rebuilding and recovering from the natural disaster. The concept of duality of the town is originated from Natsumi Seo, a film director and an author. In her book, the duality of the town (or, *NiJyu No Machi/ Kotaichi No Uta*) was purposed, echoing the above discussion of the deviation of memories between outsiders and insiders (瀬尾,

2021). After the presentation, Professor Cheung mentioned that there's a real example of the dual town, showcasing how the theory can possibly be applied to the reality.

た』, 書肆侃侃房.

TOHOKU UNIVERSITY AND LU XUN

During the trip, other than the lesson of the disaster, Lu Xun and inter-communication between Japan and China was another important theme. Seeing the notes taken by Lu Xun, and flipping through the Japanese handwritings, it is difficult to, even, imagine that how smart and intelligent Lu Xun is. It is unreal to visit the classroom where Lu Xun used to study and Professor Fujino used to teach, after reading the passage a few years ago.



References

1. 仙台市「津波で孤立する荒浜小学校」, 2011年3月11日, 2024年9月12日情報取得, <https://www.city.sendai.jp/shiminkoho/shise/daishinsai/zenkoku/photoarchive/engan/009.html>.
2. 瀬尾夏美 (2021), 『二重のまち／交代地のう

这是我第一次参加东亚研究项目的活动。来到了仙台，参观了日本三景之一的松岛、金碧辉煌的瑞严寺、厚重的 311 大地震遗址、精心保存的东北大学鲁迅遗迹、还有仙台战后重建博物馆、仙台城墙遗址等地，聆听了社会学和人类学的两场讲座。从自然到人文，从古至今，从实践到理论，一场丰富的旅程。

仙台是一个沟通中日的地区。虽然这是第一次来到日本仙台，但与它的缘分要更早一些。

初中，我在体育课上观看了平昌冬奥会的比赛录像，便开始关注一位卓越的日本选手——羽生结弦，也了解了一些他的故乡仙台。这次在仙台参访学习的时候，时常会想起 2015-2016 年，羽生选手的表演滑节目《天与地的安魂曲》。这套表演的选曲是作曲家松尾泰申为 311 东日本大地震所作的镇魂曲。羽生选手是大地震的亲历者，他的人生和职业生涯也深受此灾难的影响。多次以赈灾、重建、复兴的名义参加滑冰演出和纪录片的拍摄，

在日语中，魂字的语渊与“风”“息”“气”有关，灵魂观念与中国同源，“无法回归身体的灵魂，顺利的话就能往生净土，但死时还存有妄念、执着的人，就只能在人世间游荡作恶了。尤其是那些被认为会给社会带来疫病和天灾等巨大灾难的灵魂，即‘怨灵’，是人们恐惧和镇魂的对象。”在古代日本大规模的战争过后，胜利者往往会举行镇魂仪式，抚慰和救渡战争死难者，并标志和平的开始，后扩展至死于天灾、饥荒的人群，成为日本传统文化的一部分。在瑞严寺，有海难者供养碑，在 311 震灾遗址公园，有死难者的姓名墙和慰灵塔，强调对死难者个体的关怀和记忆，强化有关死亡，即灾难发生的那一刻及之前的记忆，同时也为在世的

背负伤痛之人以一种永恒铭记的方式，一种神性的默哀和悲悯提供慰藉，通过表达哀伤而放下哀伤。仙台对天灾的纪念中，自然以一种强大而不可控的姿态出现，与人类形成鲜明的参照，似乎唯有同样浩瀚的悲哀之感可以与之匹配，在这样的悲哀感中感到生命的价值。虽然无法精准地形容和概括，但我感到这是一种与中国黑色纪念相异的方式，在查阅了一些资料之后，以此为主题做了发表。发表中也涉及了一些两位老师的讲座带来的思考。

渠敬东老师的讲座带我们回顾了社会学这门学问诞生之初的问题意识和学科关怀。社会学是为探究和解决人类发展进程到达现代社会阶段后出现的共同的新危机，以及不同文明和族群如何不被历史的潮流遗弃吞噬的问题。涂尔干提出了社会学的经典问题——现代社会道德危机的普遍存在，神圣生活的缺失，人的个体化等等，持续在历史和现实，在理论和生活中，回响激荡。作为一种可能提供更丰富和真实的世界观的思考视角，张帆老师介绍了风土的概念，意在“将风土带回社会学讨论”，重新发现人与世界联系的存在，以此重新理解社会学中的许多现象，对“文明”“文化”等概念有新的认识，并发现很多过程并不是绝对的，比如在同学的发表中所讨论的个体化与集体化。

回到这趟研学之旅本身，从中国来到日本，在异域，获得的对异质的文化的第一感受往往是真切而模糊的，先是风土与风土的碰撞发生，然后由此而生的求知欲、探索欲推动着这些思绪落地，同时，完成一次次思想的交流。比如，在瑞严寺，我看到了许多为非人生命而建的塚，想到了秉持万物有灵论的神道教。进而思考，在日本传统文化中，

人与自然呈现出何种联系呢？发表的主题，也是由类似的路径而来。不过，风土所涵盖的领域当然比思想要更加广阔，身体经验就是其一，无论有无意识，所见所听所触及的世界不停息地与我们的内在进行着交换，知识会不经选择地进入我们的心灵。只从位置上说，是跨越了国界，但经验上，还有以灾难、战争为对象的旅行，如孙飞宇老师所补充的，孙飞宇老师的补充也呼应了这一思想的角度。我们会对与我们没有直接关系的灾难和人群表示哀悼这一现象，具有独属于文明的属性。在对灾难及死亡的记忆和哀悼过程中，没有被灾难本身波及的人群也共有了灾难的经历，受到它的影响，对自我，和这一记忆的共同体某些认识因而建立或者强化，提醒灾难之外的我们并非“置身事外”。



那些好奇的感情，敬畏的感情，悲伤的感情，出于生命本身，与身体难以分割，由这些心情驱动的行动以及它带来的实践体验，又似乎带着一些超越生命的意义。我想要学习求知的初心，可能就在于此吧。自由，解放，等等，总是些抽象而美好，或者说至少怀抱着美好的愿景而生的词汇，在材料中阅读的，在文章中分析的，虽然也是自身能力不足的缘故，总为其复杂性而感到，一种，像是在极度困倦时喝下咖啡后，一种枯萎着燃烧的情绪，热烈而中干。因为，与这些美好紧密相关的悲剧确乎是真实的历史。该以什么观念面对过去和当下呢？如何与所有的各种的痛苦相处？种种试图提出的答案始终在困惑着被所学和自己质疑。

世界和自己也因而变得混沌起来。虽然如此，即便如此，也要坚守着一些意义。初心和真诚的情感，支撑着这样的信念。



Summer Institute 提供的这种模糊的又具体的，由浅入深的学习体验与我而言是宝贵的财富。因此十分感谢东京大学和北京大学的各位老师和学长学姐，以及在这五天共同生活学习的伙伴。老师们的安排，无论是学习日程还是风土体验上，都十分周到，感到必须要说一句“ごちそうさまでした”。日本同学的热情和体贴很快就将我带入了舒适的社交状态，相互学习交流的气氛十分浓厚。期待着“未完待续”，今后也要努力参与“东亚研究”项目的各项活动。

珍惜那些真诚流露的感情吧，愿我可以永远为鲜活的生命而热泪盈眶，踌躇满志。



Group4

Member

HAN Binze

韓浜澤

The University of Tokyo

KOINUMA Yoshimune

小井沼孔心

The University of Tokyo

ZHANG Liaoliao

张了了

Peking University



"Reconstruction of Fudo"

- Reconstruct not just physical spaces, but also the emotional, cultural, and communal aspects of a place, which are deeply connected to its identity and the memories of its people
- A tool to bridge the gap between citizens' expectations and the government's approach to reconstruction



Our perspective

1. The reconstruction of Fudo (風土復興) carries a significance distinct from general post-disaster recovery, which focuses on restoring daily life and economic activities.
2. Reviving the local culture and environment aids in fostering a correct understanding of the disaster and its impacts.
3. Limitations of this revival
 - There are perceptual differences between those who experienced the disaster and those who did not.
 - True "restoration" may never be fully achieved, but through the revival of local culture and environment, we can pursue the broader goal of human well-being.

Echoes of Memory and Resilience in the Wake of Disaster

Binze Han 韓浜澤

The University of Tokyo

This summer, I attended the EAA Summer Academy, a program co-organized by our university and Peking University, held in Sendai, Japan. Sendai is a city steeped in history and emotion, primarily shaped by the profound devastation of the 2011 Great East Japan Earthquake and tsunami. Every corner of the town seems to carry a story of trauma and resilience.

We explored urban and rural areas during our visit, immersing ourselves in the local culture and way of life. One recurring theme in our discussions was the concept of “fūdo,” which refers to more than just geography and climate; it describes the profound relationship between people and their environment. Sendai, situated on the Pacific Ring of Fire, is vulnerable to frequent seismic activity, and its coastal location leaves it exposed to tsunamis and the effects of climate change. This “fūdo” shapes every aspect of life, from agriculture and fishing to cultural custom. It influences how people think, remember, and understand their place in the world.

One of the most impactful experiences of the program was visiting areas devastated by the tsunami, as well as the memorials and museums that commemorate the disaster. Professor Cheung guided us and shared historical facts and his connection to the region. His insights made the recovery process feel real, showing us that recovery isn't just about rebuilding physical structures—it's about healing emotional and psychological wounds that often take longer. Walking

through areas that had once been destroyed, I was struck by the contrast between the signs of recovery—new homes and businesses—and the lingering scars of devastation. It was a powerful reminder of life's fragility and the long, arduous path to full recovery.



As visitors, we could never fully grasp what it's like to experience such a disaster firsthand. Memory, especially in disaster, is intensely personal and often difficult to articulate. Even for those willing to share their stories, the weight of their experiences can be hard to convey fully. This made me realize just how limited our understanding is as outsiders. We saw only a tiny piece of a larger, more personal narrative.

A pivotal moment came during Professor Sun's comments after the student presentations. He posed a question that deeply resonated with me: “What truly separates those who have experienced disaster from those who haven't?” This question challenged my earlier assumptions. Before coming to Sendai, I thought of earthquake

and tsunami survivors as fundamentally different from myself—people who had endured unimaginable hardship. However, Professor Sun's question made me realize that while we may not have lived through that specific disaster, we all carry our forms of pain, struggle, and loss. In that sense, the gap between us and the survivors wasn't as wide as I had imagined. This realization shifted my perspective. I began to see us not merely as observers but as part of a broader, shared human experience of coping with trauma, recovery, and environmental challenges.

As climate change continues to reshape the world, the experiences of the people of Sendai may become increasingly relevant to us all. Natural disasters are becoming more frequent and severe, and the lessons we learned here—about resilience, adaptation, and memory—have much to teach us. Recovery is not just about rebuilding homes and infrastructure but also lives and communities. Even years after the disaster, that process is ongoing. It's crucial to remember the events themselves and the lessons they've taught us about resilience, compassion, and the power of community. This responsibility doesn't fall solely on those who lived through the disaster—it's one we all share.

I now feel a more profound sense of responsibility—remembering what happened in Sendai, carrying forward the lessons I've learned, and applying them to my life and community. I'm immensely grateful to the professors who made this program possible, and I feel incredibly fortunate to have been part of such a meaningful experience. It has changed how I think about disaster, memory, and recovery and has reminded me that we are all part of a shared human story. As we face an uncertain future, we can learn much from

the strength and resilience of people of Sendai.

今回は昨年度に続き 2 度目になる SI 参加であった。前年と比べると参加者は若干程度減ったものの、今回は仙台への出張研修ということで非常に盛り上がっていたと感じた。私にとって今回の SI への参加は非常に意義のあるものになったと感じている。最初こそ北京大学の学生と仲良くなりたい、友達を作って来学期の生活を豊かなものにしたいというものであったが、仙台という土地の持つ歴史や、災害の記録などを踏まえた学習をできたことは私の人生の中で初めての経験で今回のプロジェクトに参加できたことを非常に幸運であったと考えている。



2 日目には仙台市内の観光や震災遺構巡りを行った。日本三景の松島を見ながらのクルーズは非常に心地よかったし、午後に見た津波の被災を受けた数々の遺構を見学し震災についての理解や、今回のフィールドトリップについての理解を深めた。個人的には 2 日目の震災遺構の見学は非常に印象的であった。私自身の学科は理数学的モデルを用いた津波の波高予測、津波

浸水の推定などを行う部門もあり、学部での授業でそれらについて学ぶ機会が少なくなかったと記憶している。私たちのグループの発表では「風土」という概念と「災害」を関連させたものを題材としてまとめた。それを行う過程で私が工学部で普段考えている災害に対する考え方とある種正反対の考えに深く浸ることができ、物事に対する様々な視点を新たに獲得することができたと感じた。



3 日目は毎年恒例の授業を行う部分であるが、今年は去年と異なり北京大学の教授方が行い、さらに 1 つ目の渠教授の部分は中国哲学的な内容を英語で表現することが非効率的であるために中国語による授業が行われたが、これは私にとっても非常にチャレンジングであった。まずは重点を聞き取り、メモを取ることに重点を置いたが、話されている単語はわかるものの、全体の統合ができず内容の理解はほとんどできなかったと感じた。先学期北京大学の授業で得たトラウマ的な感覚が鮮明に思い出される一日であ

ったと感じた。午後は昼食を済ませ、休憩をはさんだのちに準備を開始し、どのグループも日付が変わったあとも1階のロビーや、各自の部屋で作業を進める人が多くいた。毎年3日目はどのグループも非常にまじめに準備に取り組み、夜中まで作業に勤しむのが普通であり、SIの中でも最も過酷な日であると感じる。ちなみに私個人的に全行程の中で最も楽しいのは4日目である。なぜならみんなで苦しんだ発表が終わった後に観光をしたり、お酒などを交わして交流したりするのが最高に心地よいし、最高に盛り上がり過ぎて楽しいからである。しかし今回は小井沼、谷、若林の3名は後ろに北京大学派遣留学が控えている関係上参加することなく仙台を後にした。この点も少し後悔の残る点であるがまあそれは致し方ないであろう。

また授業や発表のような完全なアカデミックな部分だけにとどまらず、北京大学生や教授陣とのかかわりの中でも、去年の自分と比較して大きく成長できたと感じる部分を見出すことができた。例えば中国語の語学能力である。私は去年SIに参加した際は自分の中国語会話能力に自信がなく、北京大学生との意思疎通には英語を用いていたが、前学期に北京大学での交換留学を経験したことや、今回SIに参加した人の中では殆どの人が中国語を話すことのできたことも相まって、ほとんどの会話が中国語で行われていたし、自分自身も積極的に中国語を用いて話しかけたりすることができたと感じた。去年のSIではこの点を反省点として掲げていたので今回のSIではその目標を達成できて非常に良かったと感じる。東アジア藝文書院のコンセプトであるトリリンガルプログラムという部分が色濃く出た非常に有意義な回であったと感じた。私たちのグループでは中国語を主に英語を混ぜつつグループ討論を行った。私自身テーマに対して疎い部分が多く、授業の内容に理解が不足している部分があったと思うが、わからない場所

に関してはグループの人が丁寧に教えてくれたり、中国語が聞き取れないときはゆっくり話してくれたり、英語や日本語を使って説明したりしてくれて、グループの仲間には非常に感謝している。また国籍の違いが個人の考え方を決定するという意味ではないが、違う国籍の学生が集まって一つの話題について論議を交わすと、双方の共通点や相違点が見えてきて議論がより一層実りのあるものになると感じた。さらに感じたのは今回は授業の内容とフィールドトリップの内容を関連付けて討論したことで、去年わかったようでわかっていない程度で終えたSIと比べて、自分にとってわかりづらい哲学的な抽象的な概念をより解釈しやすい形ですっと自分の心に落とし込むことができたと感じた。このことも大きな成長の一つであると感じた。

最後に毎度のことではあるが、このようにSummer Instituteを滞りなく行うことができたのは授業を担当して下さったり、テーマを選出してくださったりした教授陣の方々や、ホテルや交通手段や一切の予約を担当して下さったスタッフの方々や、一緒に参加してくれた学生たちのおかげであることを念頭において感謝の念を示したい。



ZHANG Liaoliao 张了了

Peking University

In 2024, the theme of our Summer Institute was "Civilization and Climate." It was my third time participating in the short-term institute under the EAA program, and I must say, it left the deepest impression on me. This was not only because it was held offline, but also because we gathered in Sendai, rather than Tokyo or Beijing, and had the chance to visit the ruins of the 2011 Great East Japan Earthquake in person.

What made this Summer Institute particularly meaningful for me were its core values and main topics, which are deeply connected to my interests and experiences in Japan. These include civilization, fudo, and disasters.

As an exchange student during my five-month stay at the University of Tokyo, I often found myself making unconscious cultural comparisons between China and Japan. These ranged from everyday observations, such as the price of vegetables in supermarkets, to the subtle differences in how Japanese and Chinese people approach the same things. I tried to identify characteristics that are deeply rooted in each civilization.

During the last EAA lunch meeting, every exchange student was asked to share their reflections on their time abroad. At that time, I expressed the view that for each civilization, distinctiveness is more important than any other factor, especially in the modern world. Differences are what make one culture stand out from others. In today's globalized world, many cities share a

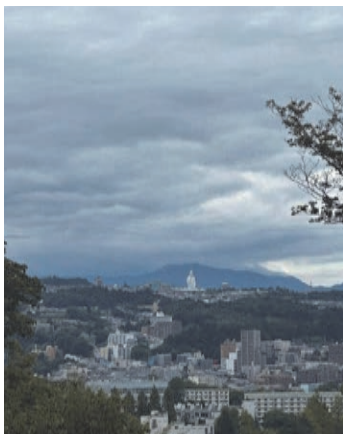
similar sense of modernity—a concept shaped by Western society. Modern cities, whether Tokyo, Beijing, or others, often have elements in common, such as skyscrapers and metro systems etc. However, what sets Tokyo or Beijing apart from other metropolises is their unique qualities, even the smallest nuances. To me, culture today is about these distinct differences.

So, from my observation, the key to effective cross-cultural communication is to engage with and discover these differences, and most importantly, to understand and respect them. Also, I think this is the essence of our program.

The second topic is fudo, or "Feng Tu" in Chinese, which provides a holistic view of societies by integrating local customs, environment, and moral orders. As Prof. Zhang mentioned in her lecture, introducing fudo into academic discourse today not only offers a more integrated and comprehensive approach to studying societies but also provides a way to move beyond western epistemologies.

The discussion of fudo aligns closely with my own academic interests. As a student who study in material culture in ancient Chinese history, I often observe how confident humans have been throughout history. People tend to ignore the non-human elements around them and emphasize human power. Aside from fudo records, it is rare to find documentation of non-human factors in Chinese traditional recording system. Yet, history has shown that nature is what humans

truly depend on for survival. Thus, the concept of fudo reminds us to focus on the beings and natural environment that surround us, helping us understand the fundamental principles that shape society.



Last but not least, disaster was a central theme throughout the Summer Institute. To be honest, before coming to Japan, I had never experienced any natural disasters. Since I have been born and raised in Beijing, where such events rarely occur. However, my time in Japan seemed to be filled with disaster-related experiences. The first time I directly experienced an earthquake was in the library at Komaba campus. One evening in June, around 8 p.m., the study table and bookshelves suddenly started shaking, creating the unique sounds of an earthquake. I was terrified and tried to resist the urge to hide under the table. However, the Japanese students around me remained calm, continuing with their work as if nothing had happened. This was the first moment I realized that natural disasters, like earthquakes, are simply part of daily life in Japan.

In addition to natural disasters, I also witnessed the severe consequences of man-made disasters, known as kougai in Japanese. During the EAA field trip this spring, we visited Tomioka

in Gunma Prefecture to gain a deeper understanding of modernization and environmental issues. We visited the Tomioka Silk Mill and the remains of the Ashio copper mine, the site of a major pollution incident in Japan. By visiting several sites about the Ashio copper mine incident, I gradually realized that the environmental problems brought about by industrialization have a wider scope, deeper impact, and longer duration than I had imagined. It seemed that in the process of industrialization in late-developing countries, irreconcilable contradictions arise between individuals and collectives, and between humans and nature.

Just as I mentioned before, my time in Japan seemed to be filled with disaster-related experiences. I realized that disasters, to some extent, are a part of Japanese fudo—they live with disasters and face them directly, which fosters a deep respect for all beings.

At the end of my report, I would like to express my sincere gratitude to Prof. Zhang and Ms. Watanabe for all their support and patience. I spent joyful and meaningful moments during my exchange in Japan, and I hope that the cooperation between EAA and Yuanpei College will last long into the future, allowing more students to participate in the program and building a friendly bridge between the younger generations of China and Japan.



Summer Institute 2024: Day 1 Field trip in Sendai

The EAA Summer Institute 2024 started from 2nd September, bringing Peking University and University of Tokyo students to Sendai, Tohoku.



The first destination of our field trip was Matsushima, an island with its rich natural scenery and historical heritage. After having lunch at Matsushima’s fish market, we visited the coastal areas of Sendai City. We visited Arahama Elementary School, the ruins of the Great East Japan Earthquake which has been preserved as a disaster memorial site. We then visited Namiwake Shrine. As the name suggests, *Namiwake* translate to “separating wave.” This religious landscape reminds us of the ways in which people try to live with natural disasters by building sacred sites and engaging in worship and veneration practices. In Yuriage, we had the opportunity to learn about the city’s post-disaster reconstruction and how people try to rebuild their lives in post-disaster period.

This field trip offered a precious chance to reflect on the theme of this year’s Summer Institute—Climate/Fengtu/Fudo and Civilization. As two lectures given by Professor Qu Jingdong and Professor Zhang Fan on the following day,

Climate/Fengtu/Fudo potentially orients us to an ontological shift in thinking the formation and transformation of civilizations.

The first day of Summer Institute ended with a warm welcome party.



Reported by Li Jia (Ph.D. student, The University of Tokyo)
Photographed by LI Jia (Ph.D. student, The University of Tokyo)
and WATANABE Rie (EAA, The University of Tokyo)

Summer Institute 2024 Day 2: Lecture by Professor Qu Jingdong

On the second day of the EAA program, students from Peking University and the University of Tokyo attended a lecture by Professor Qu Jingdong from Peking University's Department of Sociology, titled Sociology as a Study of Civilization.

The lecture focused on the role of sociology in understanding the interaction between civilization and modernization. During the session, Professor Qu emphasized that sociology must extend beyond contemporary social issues and consider the deeper historical roots of civilizations. He explained how the works of Karl Marx, Émile Durkheim, and Max Weber offer valuable insights into the development of modern societies. He also stressed the importance of each society developing its own sociological approach, reflecting its unique cultural and historical context. Professor Qu further discussed the challenges modernization presents, noting that while it brings economic development, it also introduces new social contradictions. He pointed out that sociology's role is to uncover and address these contradictions. The lecture also highlighted the importance of adopting a global perspective in sociological research. Professor Qu encouraged students to explore how different civilizations interact and influence each other, stressing the need to balance local experiences with broader global viewpoints to better understand social change.



Reported by HAN Binze (The University of Tokyo)

Summer Institute 2024 Day 2: Lecture by Professor Zhang Fan

The second lecture, delivered by Prof. ZHANG Fan, Assistant Professor at Peking University's Sociology Department, was titled "Civilization and Climate" (文明と風土). Prof. ZHANG began with a brief introduction to modern anthropology, which focuses on the study of small communities within larger societies through observations and fieldwork. She pointed out its limitations, such as power imbalances between researchers and subjects, and the lack of domestic perspectives.

Prof. ZHANG then introduced the Chinese concept of "Feng Tu" (風土), offering a holistic view of societies by integrating local customs, environment, and moral orders. This aligns with the trend of "indigenous" anthropology, where scholars study their own societies to challenge Western epistemologies. To explain "Feng Tu" in more detail, Prof. ZHANG analyzed three texts of "Feng Tu Ji" (風土記).

In conclusion, "Feng Tu" challenges the rigid divisions in modern social science by emphasizing the interconnection of humans, nature, and culture. It offers a way to move beyond "Western individualism" and provides a more integrated and comprehensive approach to studying societies.



Reported by ZHANG Liaoliao (Peking University)

Summer Institute 2024: Day3

The third day of Summer Institute began with a visit in Archives and Lu Xun's Lecture Hall at Tohoku University. Following the farewell party, students gave their presentations at the Sendai Mediatheque.



The presentation given by Group one (Maruyama Mai, Wakabayashi Manabu, and Ouyang Yafei) raised the question of how to develop a comparative perspective in analyzing modern civilization in China and Japan. They anchored their discussions in the contexts of natural environments, civil lives, and rapidly changing social realities in both societies.

The presentation of Group two (Tani Shiori, Chen Leyan and Zheng Bowen) focused on the relationship between human and nature. They referred to the text Watsuji Tetsuro's *A Climate* and the Chinese context of 《真腊风土记》 and examine different ways in which humans interact with nature under different climate conditions. After shifting from theoretical texts to empirical experiences, they further discussed how people in Japan have been coping with natural disasters such as the Tsunami.

Reflecting on the field trip of September 2nd, Group three (Nakai Hiromoto, Xue Yi, Gu Binrui) gave the presentation titled "Disaster memory and post-disaster reconstruction." They first touched upon the post-disaster life Sendai by discussing how

people remember and mourn their loss that were buried in the vanishing town. Then, they raised the question about the social meanings of disaster memorializing, and discussed how disaster memorializing might socially, emotionally, affectively, and politically shape the ways people live in the present.

Group four (made up of Zhang Liaoliao, Koinuma Yoshimune, Binze Han) presented on the topic “Reconstruction of Fudo: Lessons from the 3.11 Great East Japan Earthquake.” They first compared the different notions of Fengtu (in Chinese) and Fudo (in Japanese). Then, group members reflected on the field trip of September 2nd, and discussed the reconstitution of Natori city in post-disaster period. Focusing on the notion of well-being, they discussed the importance of expanding post-disaster reconstruction from physical aspects to interpersonal networks, cultural and public life.



Reported by Li Jia (Ph.D. student, The University of Tokyo)
Photographed by LI Jia (Ph.D. student, The University of Tokyo)
and WATANABE Rie (EAA, The University of Tokyo)

Participant List

ISHII Tsuyoshi	石井剛	EAA Director, UTokyo
SUN Feiyu	孙飞宇	Associate Professor, PKU
QU Jingdong	渠敬东	Professor, PKU
ZHANG Fan	张帆	Associate Professor, PKU
CHEUNG Ching-yuen	張政遠	Professor, UTokyo

Group1

MARUYAMA Mai	丸山真衣	The University of Tokyo
OUYANG Yafei	欧阳雅非	Peking University
WAKABAYASHI Manabu	若林学	The University of Tokyo

Group2

CHEN Leyan	陈乐言	Peking University
TANI Shiori	谷菜里	The University of Tokyo
ZHENG Bowen	郑博闻	Peking University

Group3

GU Binrui	顾斌瑞	Peking University
NAKAI Hiromoto	中井博元	The University of Tokyo
XUE Yi	薛奕	Peking University

Group4

HAN Binze	韓浜澤	The University of Tokyo
KOINUMA Yoshimune	小井沼孔心	The University of Tokyo
ZHANG Liaoliao	张了了	Peking University

Staff

REN Jianrun	任剑润	Yuanpei College, PKU
LI Jia	李佳	Ph.D. student, UTokyo
WATANABE Rie	渡辺理恵	EAA, UTokyo
FUKADA Megumi	深田めぐみ	EAA, UTokyo
CHANG Cheng-Ting	張政婷	EAA, UTokyo

仙台行

Qu Jingdong

渠敬东

北京大学博雅特聘教授



仙台对于我，所知甚少。只有小时候读过鲁迅的《藤野先生》，再就是从学后所知的青木正儿教授，他是大民俗学家，对中国影响很深。

藤野先生的形象和故事，留在鲁迅的字里行间里，那是人过中年的文字，记忆里的痕迹最凿实：师生之间，仿佛分不清彼此，鲁迅的身上似乎总有藤野先生的影子，他回忆自己的先生，即是对自己的认知。不知怎地，每读此篇，不只为人间的故事感动，也觉得鲁迅笔下的风物有趣。比如，他作为清国留学生初到仙台，就有这样的体会：

大概是物以稀为贵罢。北京的白菜运往浙江，便用红头绳系主菜根，倒挂在水果店头，尊为“胶菜”；福建野生着的芦荟，一到北京就请进温室，且美其名曰“龙舌兰”…

…

记得有人说，鲁迅的此番比喻，讲的是弱国国民的心酸心理，他得到藤野先生同情和帮助，却似乎有一种被施舍的感觉，还有人解释说，由此，他又再生出了自我戏谑或自我嘲弄的情绪。人的感情有多复杂，人的感情可以被解释得多复杂，我猜不透。不过我们可以知道的是，人和物一样，放置原来的地方很日常、不显眼，可换了地方，或贬低或夸大，或干脆变了模样。换言之，人与物都很具体，生在哪里，长在哪里，就有哪里味道；无一时一地的人情风土，又哪来世间的风景和故事呢？由此看来，要认识“胶菜”，还得回到白菜的故乡，体会藤野先生和鲁迅的动人故事，一定要到仙台。

有此新知，需要机缘。正逢北京大学和东京大学通识教育交流项目，题为“文明与风土”，邀请我来，我确实有些迫不及待。于是，两校师生从东京羽田机场下了飞机，就坐上新干线，直奔仙台。能来仙台，赖于东京大学张政远教授的起意，他虽是香港人，却留学此地，恋爱此地。他的妻子就是宫城县山里的人，他爱得深，便讲得勤，兴奋之情溢于言表。火车还没到目的地，那里的山川和田园、人口和物产、风俗与景致，已宛在眼前了。

像北京和东京这些大城市里的人，既不知“风”，也不知“土”。风是气息，土是基质，风是流变的，土是稳固的，风是文明的动力，土是文化的根据。今天的社会，无论城市乡村，都是大都市现代文明养育成的，高楼阻挡了风，水泥遮盖了土，所谓知识，也纯是一般的、抽象的甚至教条的，所谓学问，亦脱不下这层坚固的外套，教育又何尝不是如此呢？常常是闭门造车、纸上谈兵罢了。没有“风”的感染和激情，没有“土”的坚忍和耐心，只能落得个“有知无识”、“有学无问”、“有教无育”的下场。

仙台城不大不小，行人可走遍每个街道，恋人可驻足每个角落。在这里，历史的层累很鲜明，还有少许的战争留痕。城市的街巷河渠，与寺庙、神社以及公园绿地均交相穿插着，很散淡，不拥挤，处处是可让人熟络的空间。我们下榻的宾馆，出门就是朝市街，所以每天早上，我都去看卖鱼，各式各样的鱼，即便好些不认识，也能闻到大海的气味；每天傍晚，也都去商店里逛，不看国际大牌，只钻特色小店；再晚些，便受日本朋友的邀约，小饭馆搓一顿，再往小酒馆小酌几杯，家长里短、奇闻轶事哏地一下都摆在了桌面。

和辻哲郎曾将风土 (fudo) 做“存在论”解，受海德格尔的影响很深。风土与他关心的人伦世界一样，亦是存在的“家”。他说：“我们是在风土中发现我们自身，在自我了解中完成自己的自由形成。而且，寒暑、暴风、洪水，不单是我们要共同防御的，我们的祖先亘古以来为之积累的智慧，也化作我们的力量”。¹这也是赫尔德所说的要从“活现的自然”中见人，即一门“人类精神的风土学” (Klimatologie aller menschlichen Denk-und-Empfindungskräfte)。在和辻哲郎看来，赫尔德和黑格尔之所以别出德国的先验论，强调风土的精神性，是因为世界的规定本来就不是纯一的，也不是现成的，需要在一时一地具体的历史层累中释放出人的活力，所以说，“世界史必须给不同风土的各国人民留出他们各自的位置”²。

不管理论家们怎么说，概念总是灰色的，不如先谈谈仙台的吃食。这里的第一“名吃”，是牛舌。仙台地处日本东北，跟历史上中国的东北一样，是个开化不足的地方，与京都、奈良和东京相比，吃的喝的都不讲究，很淳朴，甚至有些粗陋。抵达仙台当晚，张教授就领着我们去一家百年老店。我们在大都会常见的百年老店，如今都是金字招牌，门口高悬金匾，装修富丽堂皇。可这里的百年老店，是一百年没变过的又老又小的店，张教授指指这儿，指指那儿，说小店的门脸、桌椅、灶台、挂画，甚至是价签，几乎从未变过。师傅还是三十年前的师傅，他光着头，直立在柜台后面，双手拢着，气定神闲，伙计们都是新面孔，可忙来忙去的样子一如从前。

不一会儿的功夫，一盘盘的考牛舌上桌了，厚厚的切片，整齐地码着，一时间让我想起了鲁迅戏说的“胶菜”。随后，一碗碗米饭也端了上来，这饭与日本人常吃的不同，

¹ 和辻哲郎：《风土》，第 10 页。

² 和辻哲郎：《风土》，第 iii 页。

颇像中国东北的二米饭，白米和糙米混杂一起，黄白相间。最后的搭配，便是牛尾汤了，一块牛尾骨煮得很烂，唯一的配菜，竟然是中国胶东的那种大葱，厚实地切了一坨，盖在上面。不瞒您说，这套组合，让我油然想起了重庆挑夫的火锅，北京车夫的卤煮，还有每个东北人都爱吃的杀猪菜。这些底层劳动人民的最爱，中国与日本没什么两样。

饭菜看着粗陋，可吃起来却和谐。烤牛舌焦里透香，越嚼越有滋味，本没什么佐料，可靠着人舌搅拌，牛舌的香气就越发绵长。粗米饭也配合得好，谷粒的立体感与牛舌的筋道充分融合，会让触觉紧跟着味觉爆发出来。牛尾大葱汤本身也是一种搭配，牛舌与牛尾，这牛身上的一前一后、一头一尾，焦香与软香对比强烈，而葱丝随着汤汁送下，那特别的辛味强行平衡着肉味，让一切画上了圆满的句号。

这餐饭菜，真可算是一种风土的教育：牛舌和牛尾，本是上等人剩下的残食，就连糙米和大葱，也怕是最低贱的食物，在本乡本土，却配合得这样好。这些物产，从没有外来的金贵，与文雅也沾不上边，却生出了一种地方小调般的韵味，天作之合，成就了大俗之美。

在仙台，烤牛舌只是一道开胃菜，真正的大美在大海。松岛之游，我期盼已久。位于仙台海湾的众多列岛，据称是日本三景之一，星罗棋布，有“808岛”之说。中国的黄山，有奇松、云海和怪石，日本的松岛，则有青松、碧海和白浪。有传闻说，松尾芭蕉云行各地后来到松岛，为这里的奇美景色所俘获，竟吟不出一句俳文来。所谓“大象无形”、“大音希声”，便是这心境的写照吧。

我们的船畅行在大海上，夏日阳光热烈，海水泛着光，耀眼灼人，船头激起的水浪，瞬间化成咸湿的水汽，浸润了我们全身，随即又结成盐晶，让人觉得兴奋。不一会儿，眼前一座座的岛屿扑面而来，又匆匆划过，宛若密匝匝的军阵，列队相迎，又如天上的舞者，翩然消逝。松岛之所以称为松岛，是因在这些散落于大海的列岛上，唯有松树在肆意生长。水中的礁岩，被海水风化、侵蚀、分割，如随形的雕塑，偃蹇多姿，错落成一首曲子。岩上的松树，在踔厉挺拔的同时，则依着海风的方向，伸展着枝干，交相掩映，化作条条绿舟，在碧海与白浪之间穿行。

的确，在海与天、水与石、松与浪之中，我们分不清是岛在穿行，浪在穿行，还是船在穿行。于是，我不免又想起了和辻哲郎的说法：东洋的季风型风土与西洋的牧场型风土的不同之处，就在于季风带来的湿气与日光的作用关系，形成了雾霭和烟霞中的独特风物，湿润的大气给日光带来的丰富变化，造就了亚洲人更微妙的情感、心理和文化底蕴。不过，季风并不总是细腻、温润的，它也会带来暴风骤雨、洪水和干旱。在盎然的生机中，自然时刻蕴含着“死”的威胁。

是的，透过礁石和劲松，我们很容易辨析出自然强力的痕迹。松岛的群松，不仅与欧陆不同，亦与中国的泰山松和黄山松不同。中国大陆虽有季风影响，却不像日本这样直接而猛烈。泰山地处北方，那里生长的松树如泰山般雄浑凝重，刚健苍劲；而南方的黄山，

则由水汽浸润，雾霭重重，端庄不失妩媚，摇曳而生俊美。而仙台的松则不同，不管是红松还是黑松，树干折曲遒劲，拼命地攀长，松枝则四面展放，自由舒张，松针是密密匝匝的翠绿色，仿佛吸透了海风的营养。在中国山水的烟雾迷蒙中，松是晕染成的笔墨形象，黑白转化的虚实之间，世间的生灭造化其中；而在日本的海上，松是明朗的、鲜亮的，在薄雾的衬托下，一道道风景如一幅幅画面，层叠地展现，松是色彩的形状，与浮世绘的套色图景完全一样。中国的松，有君子之风，而日本的松，则装载了武士的精神。

我们的船绕行海上，靠了岸，就是著名的日本临济宗瑞岩禅寺了。山门外，海岸边，跨过虹桥，便是一座木制的佛堂——五大堂。小小的堂门紧闭着，据说佛堂每 33 年才会开放一次，可几百年海风的刮蚀，木制建筑留下的苍老面容，迎面即可感知：是木纹还是皱纹，一时让人难以辨认，还有上面那些斑驳的盐晶，如古老的包浆，将所有的自然与历史融为一体。据石井刚教授说，这座佛堂之所以历经无数地震海啸而屹立不倒，不仅因为建筑的结构灵巧稳定，更因为有上百个岛屿的拦截和守护，即便是狂暴的海啸，到此也成了强弩之末，浪涛一波了。

由此，我不禁想起了拜伦在《恰尔德·哈洛尔德游记》中的一句：

插翅雄狮国的许多大理石的楼堡，
威尼斯，
就在那儿庄严地坐镇着一百个海岛！

虽然历史的情势、境况和涵义都不尽相同，但这足足的上百个海岛，就可以引起东西文明之间的共鸣吧。可这次仙台之行，留给我强烈震撼的，是 2011 年日本大海啸灾区遗址的考察。那里的海、那里的风，那里的松，始终逼近在我眼前：在乌云的笼罩下，海是深灰色的，风也是深灰色的，巨浪翻卷，岸边遍处是断了脊、剥了皮的大树枝干，横卧沙滩。高高的松树散落在堤岸上，长长的树干孤悬天边，只有顶部的几丛针叶，透露出顽强的生的气息，而十米之下，皆为死的痕迹。

无法想象，2011 年 3 月 11 日的那天，10 米高的巨浪瞬间倾灭一切，人的生命、松的生命，建筑的生命，文明的生命，沿东海岸线的大片区域，混着海水而纵然消失。死亡突然降临，没有喘息，没有闪念，和辻哲郎这样说过：“潮湿意味着自然的淫威。……势不可挡地袭向人们，其威力之大足以使人们放弃与之抗衡的念头。”是的，东亚的季风型风土，同时孕育着生与死，生是绵长的，死是短暂的，生是湿润的，是绿色的，是美，死是暴烈的，是灰色的，是不破的真理。如今，我们在灾后纪念碑上，可以辨认出一家一家人的离世，从特意留存的废墟上，可以辨认出建筑内饰华丽的瓷砖，甚至孩童的玩具，如花

之飘零，一切皆成瞬间。

然而，和辻哲郎却接着讲到：

而潮湿的自然威力却是一种充满生命力的威胁，不是自然中所存在的“死”的威胁。死存在于人的一方，盎然的生机欲将人们内心潜在的死神赶走。人不可能凭借自身生存之力来对抗生命的源泉之力，在这里，忍受就是对生命的服从。

因此，这里的文明，不是由“死亡”构建而成的文明，而是在生与死的无限转化之中所形成的顺应自然的生命。服从死亡，事死如事生，从生命的代际延续中去看待生死的传递和轮转，才是这种文明的真正生命所在。在这个意义上，我们也看到，一切灾后重建的工作都在平静地进行，鲜有恐惧，没有怨愤，只有服从，服从自然周期性的暴行，及其无尽的孕育和滋生。

由此，大海堤岸上的那几棵孤零的长松，再次复现在我眼前，虽然身边的亲人和友伴早已被巨浪吞噬，而他们既然因命运活了下来，就干脆成了活着的象征，让幸存或新生的人们去看，去发现，去继续迎接死的挑战，去继续保存生的平静。由此，我也猛地想起，我们曾拜访过的那间坐落于汤殿山的浪分神社。就是这间小小的神社，几经千年的历次海啸洪水，皆到此终止。它似乎告诉人们，人类虽无力抵抗自然，却要依托神的护佑，去发现自然的界线。这神圣的区域，就是阴阳两隔、生死相遇的水线，是恶魔施虐的临界，也是重获生命的起点。

我记得，王汎森讲刘咸炘的时候，曾引用龚自珍的《释风》一文：“万状而无状，万形而无形”。刘咸炘自己也说：“观事实之始末，入也；察风势之变迁，出也”；而且，若论上下之纵观，要重“时风”，若论左右之横观，要重“土风”。其实，法国启蒙家们，伏尔泰、狄德罗和孟德斯鸠等所讲的 *moeurs*，即风俗或风尚，或译为民风与民情，亦多有此义于其中。照此来说，风与土如何可分呢？风为“气”，“土”为“质”，风有“气息”，土有“质量”，分析或指标性的学问发展到了今天，又如何能够理解写在一个民族或一种文明，或一段历史身上的这种“气质”呢？风与土，才真正构造了海德格尔所说的那种存在之世界，不为形而上学的普遍预设所侵染，也不会将人与自然析分成无数细小的颗粒，而被降解。

于是，我坐在鲁迅先生曾经的教室里，讲台和桌椅满是一百多年前的气息，那位叫做藤野严九郎的先生仿佛就站在黑板前面。我们知道，就在这里，年轻的鲁迅改写了自己的人生。但那时候，鲁迅毕竟年轻，虽有改变自己的勇气，还没有改变世界的勇气。民族的悲剧让他情伤而落魄，还无力承受，他说：“我离开仙台之后，就多年没有照过相，又因

为状况也无聊，说起来无非使他失望，便连信也怕敢写了。”随着时间慢慢消逝，先生也“杳无消息了”。可是，先生的影子却有如仙台的风土，刻在他心里。

我想，鲁迅由他的新生，直至他的生命熄灭之时，藤野先生都给出了一种原力：

每当夜间疲倦，正想偷懒时，仰面在灯光中瞥见他黑瘦的面貌，似乎正要说出抑扬顿挫的话来，便使我忽又良心发现，而且增加勇气了，于是点上一枝烟，再继续写些为“正人君子”之流所深恶痛疾的文字。

重读鲁迅先生的这些句子，仙台海岸上的长松便会现在眼前：它虬曲般地挣脱着，任凭风吹雨打，海啸吞蚀，也会像一道闪电，发出光亮。风是有传播性的，土是扎根的地方，藤野先生如此，鲁迅先生即如此。

Zhang Fan

张帆

北京大学社会学系助理教授



2024年9月，北京大学-东京大学联合暑期工作坊以“风土与文明”为主题进行了讲座和讨论。在讲座中我选择了以日本思想家和辻哲郎的《风土》为切入点展开讨论。和辻哲郎是日本现代风土论的奠基人物，在海德格尔哲学的影响下，于1935年写作《风土》一书，他在书中将风土理解为人身处其中的气候和环境，构成了一种存在的结构，作为主体的人在其中将自己客体化，在接近风土的同时认识自己。这一风土概念受到西方思想的影响，即使强调风土作为主体的客体化，也难以避免主客二分之嫌，容易滑向环境决定论。尽管如此，在一定意义上，风土概念对现代科学造成的主客二分、文化-自然二分构成了反思。回到中文语境，我们可以看到，“风土”概念在汉语文献中出现的非常早，与耕种和农业密切相关，展现为一套落实于地方的生命-技术-象征结构。汉语文献中“风土记”文本也构成一种文类，自汉代以来层出不穷，广泛涉及对域外、少数民族和汉人区域的观察，只是随着近代西方启蒙思想的传入，风土记逐渐被科学考察民族志所替代。重新回到风土记文本，比如李来章（1654-1721）作于1708年的《连阳八排风土记》和吴汝纶（1840-1903）刊刻于1900年的《深州风土记》，我们可以看到风土记展现出一种不同于民族志的文明观，这种文明观有助于我们反思人与自然、自我与它者的关系，从而形成一种新的民族志书写和区域比较新路径。

在北大和东大同学们随后的小组报告中，大家围绕这一主题展开了讨论。或许是因为风土概念对人与自然关系的反思贴近同学们对时代和现状的感知和思考，很多同学从对日本仙台东北海啸的灾难现场的参观谈起，或者纵向比较了中日历史上的各种灾难，或者横向比较了亚欧各地曾经的灾难，或者分析了中日思想史对人、自然的不同理解，最终回归到自身直面灾难现场的感受，深化了对风土与文明、自然与人等议题的认识。

这次暑期工作坊的仙台之行，尤其是对海啸灾难现场的参观，使我对灾难有了切身感受，也对自己的研究有了更深刻的反思。看到灾难现场满地的断瓦残垣，我想同行的师生们和我一样，会感觉在这种瞬间席卷一切的灾难面前人类太渺小。对自然的敬畏是战天斗

地掌控万物的现代科学中被抹除的部分，但在很多古代思想中依然存有这种敬畏，比如仙台的分浪神社。这些古老的智慧让自诩为科学研究者的我们不断反省。最终我们都停步于一面残墙边，拍下了墙上被无意留下的一辆迷你玩具汽车，这个玩具让我们对渺小但也坚韧的人、互助共渡难关的人生出无限敬佩。

非常感谢东京大学教养学部的诸位老师，尤其是石井教授、张政远教授、渡边老师，使得这次工作坊得以成行。我至今依然时时想起，在仙台夏末的午后，与东大和北大的师生们共同涉过那片狂怒又平静的海，感受人的渺小和人性的温暖。

Afterword

Cheung Ching-yuen

張 政遠

綜合文化研究科教授



Fūdo is a concept coined by Watsuji Tetsurō, one of the most important modern Japanese philosophers. This notion about wind and earth is, unfortunately, translated as “climate” in English. In his book *Fūdo* (1935), Watsuji mentions the phenomenon of climate, but he explains clearly that *fūdo* is more than climate. He writes, “My purpose in this study is to clarify the function of climate as a factor within the structure of human existence.” Precisely speaking, he defines *fūdo* “as a general term for the natural environment of a given land, its climate, its weather, the geological and productive nature of the soil, its topographic and scenic features. The ancient term for this concept was *Suidō*, which might be literally translated as ‘Water and Earth.’ Behind these terms lies the ancient view of Nature as man’s environment compounded of earth, water, fire, and wind. It is not without reason that I wish to treat this natural environment of man not as ‘nature’ but as ‘*fūdo*’ in the above sense.” (translation modified) In this year’s summer institute, we had a chance to visit Sendai, a city with a rich *fūdo* in terms of nature and culture. Along the coastline, we visited Matsushima, one of the three most scenic spots of Japan and where the national treasure *Zuiganji* is located. We also visited Arahama and Yuriage, two local villages devastated by the tsunami in 2011. While in some cases we may have to forget the traumatic memory of disasters, we need to protect *fūdo*, which could be destroyed easily by natural disasters or atrocities. How can we preserve the memory of *fūdo*? We made a visit to Namiwake Jinja, a shrine not only as a religious facility but also as a memory device. From my reading of *Watsuji’s Pilgrimage to the Ancient Temples in Nara* (1919), doing a pilgrimage to the temple or shrines is not for religious reason but a philosophical one: to recollect the memory in the past, to reflect on our daily life, and to hope for a better future. Following the footsteps of Lu Xun (1881-1936), who studied in Sendai 120 years ago, I hope we can have a better understanding of Lu Xun as well as ourselves.

First published January 2025

by East Asian Academy for New Liberal Arts, the University of Tokyo

Edited by WATANABE Rie, FUKADA Megumi, LI Jia, CHANG Cheng-Ting

Copyright © 2025 East Asian Academy for New Liberal Arts, the University of Tokyo

Correspondence concerning this book should be addressed to:

EAA, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan